

---

# ETARNIA STORY

天駆ける翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ETARNIA STORY

### 【Nコード】

N7072J

### 【作者名】

天駆ける翼

### 【あらすじ】

世界は相変わらずそこにある。

私立帝学園に通う高校生、鳴月龍斗は賑やかな家族や学友に囲まれて充実した日々を過ごしていた。こんな日常がいつまでも続く、そう思っていた。……あのときまでは

妹である鳴月遥香の突然の失踪、帝グループの暗躍、鳴月家の秘密、そして異世界「エターニア」の存在。混乱の中、龍斗は妹の失踪の手掛かりを求めて異世界へと足を踏み入れる。複雑に絡み合った運命の果てに辿り着いたとき、彼の眼に映ったものとは……

＊ ＊ この作品は『学園編』と『ETARNIA編』の二つのパートがあります。まずは『学園編』から始まるので、そのつもりでよろしく願います。 ＊ ＊

## 1 - 1 ・ 強さの理由

あれは確か八年前、もう日が沈みかけようとしている時間帯のことだった。

門限である五時を一時間ほど過ぎて家に帰った僕にかけられた言葉は「おかえり」でも「遅い」でもなく、こんな言葉だった。

「龍斗か。遥香がどこに行ったか知らないか。まだ帰ってこないんだ」

父さんのこの言葉を聞いたとき、なぜかとてもいやな予感がした。妹の遥香は両親の言うことをよく聞くいい子だった。

妹が両親との約束を破ったことは、僕の知る限りでは一度もない。そんな妹が門限を一時間も過ぎているのにまだ帰っていない。

何かあった。

なぜそう思ったのかわからない。証拠があるわけでもないのに遥香に何かあった という妙に確信に近い感覚が僕を支配していた。気づいた時には、僕はもう来た道を走りだしていた。

\*

\*

\*

「お嬢ちゃん、ちよつといいかな？」

私がいつものように公園であそんでいたら、いつの間にか目の前

に知らないおじさんがいた。

ちら、と私は首を動かさずに視線だけを上げてそのおじさんの顔を盗み見る。

なんでだろう、とびきりの笑顔で笑っている。

……どうしよう、知らない人に声かけられちゃった。お母さんが知らない人と話しちゃ駄目っていつてたし、……無視しちゃうおう。

「……………」

お母さんとの約束を守って無視をすると、またおじさんに声を掛けられた。

「あれえ、無視しちゃうんだ。ねえ、ちょっとボクとお話ししようよ」

……この人きもちわるい。そう思って私は立ちあがった。

もうすぐ五時になる。お母さんとの約束だし、もう帰ろう。

おじさんのことを無視して横をすり抜けようとする。

「お話ししようって言うてるのに。無視して行っちゃうんだ。へえ。

……ね、ね、お嬢ちゃん、ちょっといいかな、いいよね、ね」

がしっ　といきまり右腕をつかまれた。おじさんはそのまま私を引きずるようにして公園の入り口に止めてある黒いワゴンの方へ歩いていこうとする。

連れて行かれる！

「いやっ！、放して！！」

とつさに腕を振りほどこうともがくが、相手は大人。振りきれは  
ずもない。

それでも必死にもがいていると、おじさんがポケットから何かを  
取り出すのがみえた。

「いや……、いやっ!」

必死に叫ぶ私の口に何か布のような物が押し当てられる。瞬間、  
ぐらりと視界が歪む。

(……助けて、だれか……、お母さん お父さん お兄、ちゃ……  
……)

助けを求める声は誰にも届かず、そして世界は闇に染まる。

\* \* \*

とつさに思い浮かんだのは公園、遥香はいつもあそこで遊んでい  
た。今日もきつとあそこにいるはず。

大丈夫、きつといる。夢中で遊んでいて時間をみていないだけだ。  
きつとそうだ。そうなんだ。

……そのはずなのに、いやな予感が消えない。心の中にそんなわ  
けがないと言っている自分がいる。

何かあった なにか、とてもよくないことが……

やけにいつもより遠く感じた公園の入り口をくぐり、暗くなり始  
めた公園の隅々まで目を凝らす。

いつも通りの公園がそこにある。シーソー、滑り台、ブランコ、  
鉄棒、ジャングルジム、すべてがいつも通り。なにもおかしいとこ

るはない。

遥香がいない。 それ以外は、なにも。

いない、どこを探してもいない。 おかしい、そんなはずはない。  
ここにいるはずなんだ、ここに。

目の前の光景が理解できない。 いないはずがないのだ。 ここ以外  
に僕は知らない。

きつとどこかにいる、隠れているんだ。 そう、隠れている……  
どこに？ わからない……。

「遥香？ ……どこにいる？ 遥香？」

名前を呼びながら必死になって遥香の姿を探す。 いない、さがす、  
いない、さがす。 あ！ あれは……

遥香の着けていた 赤いマフラー

視界が真っ暗になる。 これまで予感でしかなかったものが確信に  
変わる。

本当に何かあった、あったのだ、ここで。 この場所で、遥香に  
何か、そう、何かとてもよくないことが。

視界が戻ってくる。 手には遥香の赤いマフラー、そして理解、遥  
香が危ない。

この状況で僕が取るべき行動はただひとつ。 マフラーが地面に落  
ちる。

公園を出るその足取りに迷いはない。場所ならわかる。

遥香が、呼んでる

\* \* \*

背中にひんやりと固い感触を感じて目が覚めた。どうやら床に寝ているようだ。いつ寝たんだっけ？

体を起してあたりを見回す。ここは一体どこだろう。たしか私は公園で遊んでいたはず……

そして……そうだ、知らないおじさんに声を掛けられて……

「つつっ!!」

思い出した。あのおじさんに連れていかれたんだ。

じゃあ、ここは、ここには……

「やあ、気がついたかい？」

突然暗闇のほうから声がした。どこかで聞いた声……あのおじさんだ。

その表情は公園で声をかけられた時と全く変わっていない。ただ、笑顔。

びくっ　と体がこわばる。怖い、笑っているはずなのに……　な



んだかわからないけど、とても怖い。

「ひどいなあ、そんなに怖がらなくても、ボクはショックだよ？」

「……」

「ふふっ やっぱり無視なんだね。まあいいよ、ここに連れてこれたんだし。やっと二人きりだね。ねえ、お父さん、いるよね。そりゃあいるよね、うん。知ってるよ。お譲ちゃん鳴月んとこの子だよ。ね。うん、知ってる。……ちよつと失礼」

そう言っておじさんは私の方に手を伸ばしてくる、反射的に肩を抱きながら後ずさるうとして……

とんっ と背中が壁に当たる。うそ……逃げられない……目前におじさんの手。ぎゅっ と目をつぶる。そしておじさんの手が私の体に触れて……離れた。

「？」

なにもされてない？ 恐る恐る目をあけると、おじさんの手には私の携帯が握られていた。

「そうそう、これこれ。これがほしかったんだよ。いやあ、持ってくれてありがとう。便利だよね、携帯って」

しまった。携帯を奪われた。これで外に連絡する手段は完全に断たれたといってもいい。

助けは来ない。 絶望的。

気が抜けて忘れかけていた恐怖がよみがえってくる。もうだめだ、そう思った矢先に、

「じゃあボクはちよつと電話してくるから。そこでまってね。…  
… 逃げちゃだめだよ？」

そう言っておじさんは奥の方へ姿を消した。ちよつとして奥の方からかすかに携帯を操作する音が聞こえてくる。… 本当に電話しているらしい。

逃げるなら今しかない、そう思った。逃げるなど言われたけどそんなわけにはいかない。

恐怖でこわばる体をゆつくりと動かして出口をさがす。

幸い出口はすぐに見つかった。ゆつくりと音をたてないようにノブを回してみる。… 開いた！

足音をたてないように注意して部屋から出る。… 成功。どうやらさっきの部屋は二階にあつたらしく、端の方に階段が見えた。ゆつくりと階段を下りる。… 大丈夫。周りを見回してみると、玄関はすぐに見つかった。

出られる！

そうおもつて気を抜いたのが悪かったのか、二階の方で バタンとドアの閉まる音が聞こえた。

二人きり さっきたしかにおじさんはそう言っていた。つまりさっきの音の主は…

まずい！

急いで玄関のドアを開けようとする。しかし…

「なんで!! 開かない!!」

いくらノブを回してもドアは開かない。いやな汗が噴き出してくる。

焦る、開かない、どうして…… そうだ! 鍵! !

気づいてすぐさま鍵を開けようと手を伸ばし カチリ と手元で音がしたところで、

「逃げちゃ駄目って言ったじゃないか」

今までとは違う、低く唸るような声を出すおじさんに腕を掴まれた。

## 1 - 2 ・ 強さの理由

\* \* \*

公園を出た後、僕はある場所を目指して走っていた。  
目指す場所はある廃屋、僕たちの間で隠れ家として利用している場所だ。

あそこなら公園からも近いし、あまり人も寄り付かない。何よりそこで遥香が呼んでいるような気がしたのだ。

遥香はあそこにいる

確証は何一つないが、やらないよりはまし。僕はただ走る。次の角を左に曲がって……

ついた！！ 地面にはまだ新しい大きな靴跡が残っている。ここだ。遥香はここにいる。

そして……気づいた。ここに入って行ったところで、僕に一体何ができる？

子供の僕では大の大人には抵抗できない。つまりここに来たのはまったくの無意味。

ここにきて自分の無力さを痛感させられる。目の前のドアを開ければ遥香がいる。

でも、はいつて行つたところで何もできない。助けたい。でも、できない。

そうなれば誰か大人に助けを求めに行くのが賢明なんだろう。でも、それもする気にならない。

目の前に遥香はいるのだ。ここでこの場から離れることは逃げることにはならないだろうか。いや、逃げるためじゃない、助けるた

めに離れるんだ。でも……、いややつぱり……

考えがまとまらない。今この瞬間も遥香は怖い目にあっているかもしれないのに。

僕と遥香を隔てている、色のはげたドア。目の前にあるはずのドアが、やけに遠く、そして厚い。

どうすればいい、どうすれば……

「やめて！ 放して！ いやっ！！」

不意にドアの向こうから悲鳴が聞こえる。聞いたことのある声……

…遥香だ！！

遥香が危ない。その悲鳴を聞いた瞬間、僕の心はもう決まっていた。ドアのノブに手をかけて思い切り引く、中に見えたのは二つの人影。そのうちの一つは……

「遥香！！」

姿を確認して思わず名前を叫ぶ。まず目にはいったのは妹の驚いた顔と頬に光る一筋の涙。そして遥香の手がつかまれているのが視界に入った。

瞬間、思考が蒸発する。

「遥香を放せ！！」

相手の顔も見ずに、遥香の手首をつかんでいる人影にむかって体当たりをかました。

思ってもいない反撃に人影は後ろに倒れこむ。そして遥香をつかむ手が離れて……

「逃げるぞ！ 遥香！！」

妹の小さな手をしっかりとつかんで、僕は走り出した。

\* \* \*

おじさんに手首をつかまれて、私はまた言いようのない恐怖に駆られた。

おじさんの目がいままでのように笑っていない。怖い、これはなんか本気だ。

そう思ったら体がこわばっていうことを聞いてくれなくなった。

まずい、動け！動け！

どれだけ念じても体はいうことを聞いてくれない。

「逃げちゃ駄目って言ったじゃないか」

ああ、もうだめだ、これは助からない。

そう悟った時、始めに浮かんできた顔は

（お兄ちゃん……）

いつも私と遊んでくれたお兄ちゃん、いつも笑わせてくれた、泣

いてる時は泣きやむまでそばにいてくれた、落ち込んでいるときは励ましてくれた。いつも私の隣にいてくれた、お兄ちゃん。

（最後に、会いたかったな……）

ふいに涙が一筋こぼれおちる。それをきっかけに体の自由がわずかに戻ってくる。

……会いたい。そう強く願う。

あ、まだいける…… 動ける！

それでも体を動かす程の力は戻っていない。それならば、最後の悪あがきは……

「やめて！ 放して！ いやっ！！」

力いっぱい叫んだ。これでだれも気づいてくれないならそれでもいい。いや、この際だれでもいい、

だれか、私を助けて……

ドアが勢いよく開けられたのはその瞬間だった。いきなり開いたドアに驚いて、

そしてその向こうに立っていた人の顔に何よりも驚いて、

「遥香！！」

久しぶりに名前を呼ばれた気がした。

\* \* \*

来た道を遥香の手を引いて走る。遥香も脚の速さの違いに必死についてきている。

「遥香、大丈夫か？」

返事はない。けれどコクコクと首を縦に振っているところを見ると、まあ大丈夫なんだろう。

……あのときはるか悲鳴が聞こえてなかったら、きっと僕はあ  
の場から逃げ出していた。

力がないから、逃げたくないから、二つの思考の狭間で押しつぶ  
されていた。

あの瞬間、確かに僕は遥香を助けたかもしれないが、同時に僕も  
遥香に助けられていたのだ。

まったくどっちが助けられたのか分かんないな・・・  
走りながら遥香に見えないように苦笑する。

その時、

「おい、なに逃がしてくれちゃってんのよ。勝手に連れてくんじゃ  
ねえよ」

背筋が凍るような声を背後から浴びせられた。

「つつ！！」

おもわず立ち止まって後ろを振り返る。そうせずにはいられない



ほどの声色だった。

そこにはさつき遥香の隣にいた奴が立っていた。目が血走っている。

だめだ、こいつ、正気じゃない。

見た瞬間に分かる。あれは正気じゃない。そして正気を失っている奴は何をするかわからない。

万が一の時には、遥香だけでも……  
遥香を背にかばって男を見つめ返す。

「なあ、勝手に連れてくんじゃねえよ。何様だお前、あ？ 正義の味方ぶりやがって、気持ち悪い。  
お前みたいな奴、嫌いなんだよね。ってことで、」

そこで男は言葉を切る。そして……

「死ねば？」

いきなりポケットからサバイバルナイフを取り出して切りかかってきた。

「つつ！！」

とつさに遥香をかばうようにして抱きしめる。せめて遥香だけでも、そうおもって強く、強く。

腕の中で遥香が息をのむのがわかった。大丈夫だ。お前は僕が守ってやるから。

「ごめんな、こんな兄で。妹さえろくに守ってやれない兄で、ごめ

んな。

最後に遥香に笑いかけてやる。……うまく笑えただろうか？  
そして覚悟を決め、目を閉じる。

サバイバルナイフが龍斗の体に迫る。そして……

「よくやった」

「ぎゃあああああああ！！」

若い男の声の後に、絶叫がこだました。ただし、それはどちらも  
龍斗の発したものではない。

絶叫は腕の骨をへしおられた男のものだった。

恐る恐る目をあける。まず目に入ったのは地面に転がっているサ  
バイバルナイフ、背筋が凍る。そして そのすぐ隣には地面でうず  
くまってうめいている男の姿。

じゃあその横に立っているのは……

「「お父さん！！」」

龍斗と遥香が同時に叫ぶ。

「二人とも怪我はないか？ もう大丈夫だよ、僕がついている」

いつも通りの、本当にいつも通りのお父さんがそこにいた。

\*

\*

\*

あの日、俺はかたくここに誓ったんだ。

強くなつて見せる

大切なものを自分の手で守れるように

遥香をこの手で守れるように

もう二度とあんな思いはしたくないから

## 2 - 1 ・ 始まりの一日

まだ日が昇るには早い時間、西の空に静かに輝く満月が二つの人影を照らし出す。

森、たくさんの木々が乱立するその場所に、少年と老人は向かい合っ  
て立っていた。

「ふおっふおっふおっ。どうしたんじゃ？ 動きが鈍くなつとるぞ、  
もうバテたのか？」

その言葉を放った老人は、歳を全く感じさせない動きで大きく一  
歩を踏み込み、少年の懷に潜り込んできた。少年はとっさに距離を  
取るために体を動かそうとする。が、長時間酷使を続けた体はその  
反応をわずかに遅れさせてしまう。

ほんの1秒にも満たないその一瞬が、老人にとっては十分すぎる  
隙となる。

老人の膝が、少年の腹部に突き刺さる。純粹な打撃攻撃 蹴り。  
たったそれだけのことなのに少年の体は十メートル以上も後方へ吹  
き飛び、地面にたたきつけられる。

「じっ、ふ…」

肺の空気をすべて持って行かれる。うまく呼吸ができない。蹴ら  
れた、そのことを理解するのに数秒を必要とした。

自分が今どんな体制でいるのかさえ分からなくなる。立たなくて  
はいけない、それなのにどこにどう力を入れたら立ち上げられるのか  
がわからない。

まずい、追撃が来る。今に老人が目の前に現れて……

来ない、追撃が、来ない。

おかしい、なぜ攻撃して来ない？ 疑問、無理やり痛みを抑えつけ老人を探す。その姿はすぐに見つかった。

さつき膝を入れられた場所、そこに老人は構えをとることもなくただ立っていた。目線はこちらを向いている。顔に冷笑を浮かべて……野郎、笑ってやがる。そのことに少年は奥歯をかみしめる。

## 手加減

明らかに手加減をされている。いや、それは始める前からすでにわかっていたことだ。もともと勝てるなどとは思っていない。しかしここまで一方的にやられるとも思っていなかった。

少年が全身にあざや切り傷ができておりすでに立っているのがやつとの状態であるのに対して、老人のほうは傷一つないばかりか息一つ乱していない。

実力の差は明らかだった。手加減して、それでもまだそれだけの余裕がある老人を相手に、どうあがこうと今の少年では太刀打ちできない。むしろこれだけの攻撃を受けて意識を保っていたこと自体が奇跡なのだ。ここからの逆転など絶対に不可能。

でも、ここでみすみす負けを認めるつもりも、ない。

やつとの思いで起き上がると、関節が悲鳴を上げた。体中が痛み

を訴えかけてくる。もう立つな、もう十分頑張った、心が折れそうになる。でも、それでも、諦めるわけにはいかない。まだ動けるんだ、倒れるにはまだ早い。完全につぶれてだめになるまであがいてやるんだ。

- - 大切なものを守りたいから。そのための力がほしいから。  
- -

少年は立ち上がって正面から老人を見据える。その体が風もないのにふらふらと左右に揺れる。立っているのがやつとの状態で、もう四肢の感覚すら失いつつありながらも、それでも心だけは決して揺らがない。その瞳に宿る光だけは、絶対に失うことはない。

「ほう……、まだ立ち上がるか。もういいんじゃないか？ お前さんは十分頑張ったんじゃない。もう立っているのも精一杯なんじゃない？」

「うるせえ、まだ諦めるわけには、いかねえんだ。ここで倒れるわけには、いかない」

「威勢だけはいいいようじゃがそれだけでわしにはとどかんよ。しかし、そうか…… そこまでの覚悟があるんじゃないやったら……、ふむ、そうじゃな」

老人は少し考えるようにそこでいったん言葉を切って、その顔から冷笑が消える。

「手加減をするのは、無粋というものじゃろっ」

老人の放つ殺気が、一瞬で今までとは比べ物にならないほどに膨

れ上がった。

「つつ！！」

全身からいやな汗が流れ出す、筋肉が疲労と緊張で硬直する、呼吸が乱れる、肺が正常に機能してくれない、頭が真っ白になる、なにも考えることができない。

### 殺される

はじめて感じた死の恐怖は、耐えがたい衝撃を空白の頭に叩きつけてくる。

自分は一体何をしている？ 一体どこにいる？ あれは一体何だ？ なぜ自分を狙っている？

わからない、目の前には老人、世界には俺と老人しか存在していないかのような錯覚。

先ほどからまるで人形にでもなったかのように動かない老人。そして……

老人の姿が、視界から消えた。

何も考えられないまま、ただ直感に従って全力で右に跳ぶ。

ぶんつ と、自分の左側から風を切る音が聞こえた。目を向けると、そこにはちょうどさっきまで自分が立っていた空間、老人の右拳が突き刺さっている。

やばい、この老人、本気だ。本気で殺ろうとしている。

思考が戻ってくると同時に、少年は老人から距離をとろうと後方へ飛び下がる。しかし老人はまるでそれを知っていたかのようにび

ったりと張り付いてくる。老人は伸びきった右腕を引き戻しながら、上半身をひねって右足を振り上げる。

……回避は間に合わない。ならば防御するしか道はない。両手を顔の前にクロスして、距離を取り損ねたせいで不安定になっている体制のまま老人の蹴りを受け止める。

ゴッ　と骨同士がぶつかり合う鈍い音が辺りにこだまする。

そのまま後ろに吹き飛びそうになるが、なんとか体制を持ち直す。両手に伝わるあまりの衝撃に少年は激痛で顔を歪める。

次の瞬間、老人の姿はもうそこにはなかった。

どこに……

姿をとらえようと視線をさまよわせたところで、

「甘い」

目の前に老人の姿、下から上に突き上げるように鳩尾へ一撃

くの字に折れ曲がる身体、両足が地面を離れる

全身を駆け巡る衝撃、体中から力が抜ける

揺さぶられる脳、思考能力が停止する

明滅する視界、世界が暗転する

薄れゆく意識の中で最後に視界に入ったものは、敵に向けるものではないやさしさに満ちた微笑み。

慈愛に満ちた表情をしている、老人の顔だった。





## 2 - 2 ・ 始まりの一日

\* \* \*

目が覚めて最初に目に入っただのは見慣れた天井。……いつ帰ってきたんだっけ、思い出せない。

まだ頭がぼんやりとしている。

ゆっくりと体を起して何度か瞬きをしていると、膝の辺りで、腕に顔をうずめて静かに寝息を立てている人の姿が目に入った。

「遥香？」

そうつぶやくと、遥香は もぞっ とわずかに体を動かしてから、ゆっくりと顔をあげた。

ぼーっとこちらを見つめている。焦点が合っていない。……寝ぼけているんだろうか？

徐々にその焦点が俺に合わさっていく。ぴつたりと目があつた瞬間、いきなり遥香は俺に抱きついてきた。

「お兄ちゃん！ 目が覚めたんだ！ よかった、おじいちゃん、傷だらけのお兄ちゃんを抱えて帰ってくるんだもん。……すごく心配したんだから」

俺はどうやら遥香を心配させてしまったらしい。いけないな、これからもう少し考えてから行動しなくちゃ……

「遥香、心配してくれてありがとう、でも、そろそろ離れてくれなかな、ちょっと苦しい」

「あつ、うん、ごめんね」

そういうと遥香は素直に俺を開放して、ベッドの横にあった椅子に腰かける。

顔はじーっとこちらを向いたまま。……よく見ると頬に涙の跡がある。眠る前に相当泣いたんだろう。まだ目が充血している。

ズキリ と心が痛む。遥香を泣かせてしまった。その事実が俺の心に重くのしかかる。

あの時、もう二度と傷つけないと誓ったのに……

これ以上顔を見ているのがいたたまれなくなってきたので、ベッドから降りようと脚を下ろす。すると椅子に座っていた遥香が急に立ち上がり、肩を押さえつけてきた。そのままベッドに押し戻される。

「あ！ まだ起きちゃだめだよお兄ちゃん、体、傷がいっぱいついてるんだから」

「痛た！ 痛い！ 痛いから！ わかった！ わかったって！ 起きないから手をどける！ 手を！！」

「だーめ、お兄ちゃん、私が放したら絶対起きちゃうもん」

「起きないって！！ 約束する、起きないから！！ だから手を放して！！」

体にはまだ先ほどのダメージが残っている。自分で動く分にはゆ

つくり動かせば何とかならないこともないが、外部から力を掛けられると、とんでもなく体中が痛む。

さつき抱きつかれた時はそんなに力が入っていなかったせいかなんとか我慢できたけど、これは無理だ、我慢で何とかできるレベルを軽く超えている。……我ながら、これだけの傷を負ってよく生きていたものだと思う。いや、違うな、これも散々手加減された結果だろう。本気で来られたら、間違いなく最初の一撃で俺は瀕死になっていた。

「むう、約束だよ？」

ようやく遥香がしぶしぶといった感じで離れてくれる。体の痛みが引いていくと同時に、なんだかものさびしい感じもした。……いやまで、俺はなにを考えているんだ？

ちょうど遥香が再び椅子に座りなおしたところで、タイミングを合わせたかのように部屋のドアが開いて、誰かが入ってきた。鳴月<sup>たづ</sup>龍彦<sup>りゅういち</sup>、お父さんと、鳴月龍一郎<sup>りゅういちろう</sup>、おじいちゃんだ。二人とも顔がにやけている。……この二人、ぜったいドアの向こうにいたな。

じとつ とした目で二人をにらんでいると、苦笑してお父さんが口を開いた。

「いやあ、本当に龍斗は遥香に弱いな。見ていて面白い。それにしても、散々な目にあったようだな。……父さん、龍斗にあまり無茶をさせないでください。孫をいじめるのがそんなに楽しいですか」

「ふおつ、まさか。こんなにかわいい孫をいじめることの、一体何が楽しいというんじゃない？ むしろかわいそうに思うくらいじゃわ」

「……あなたがそれを言いますか。龍斗をこんな姿にしたのはあなたでしょうに」

「ふおつふおつふおつ、そうだったかのう？　最近物忘れが激しくての、もう覚えとらんわ」

「全くあなたって人は本当に……。もういいです。聞いた私が間違っていました」

おじいちゃんとそんなことを話していたお父さんはそこで会話を断ち切り、俺の方に向き直った。

「龍斗も、あまり無茶はするなよ。お前が怪我するたびに神楽耶さん、ものすごく心配するんだから。……まあ、その感じだと大丈夫そうだな。まだ体中痛いだろうが、丸1日もすれば痛みも完全に消えるんじゃないかな。それまではゆっくり寝ていなさい。くれぐれも動きまわったりしないように」

お父さんは俺の顔を覗き込むようにして諭すようにそう言った。いつも俺たちのことをやさしく見守っていてくれる、心配してくれる。強くて、かつこよくて、俺の自慢のお父さん。

「あたりまえじゃ、龍斗に傷をつけないようにとどれだけわしが苦労したか。この程度でへばっておるようじゃ、鳴月の名折れじゃわい」

じいちゃんはそう言いながら俺の頭をワシャワシャとかき回した。がくがくと頭が揺さぶられる。それにつられて体も前後にゆれている。ゆれているのに体に痛みはない。おそらくおじいちゃんがそうなるように力加減を調節しているんだろう。

いつもは厳しいおじいちゃんがこういう細かいところでとても優しいことを俺は知っている。

抵抗するのも面倒なので、俺がおじいちゃんのするがままにされ

ていると。ふつ　とおじいちゃんの手が離れた。見上げるとそこには、真剣な顔でこちらを見ているおじいちゃんの姿。

何か大事な話があるんだ、俺はおじいちゃんの顔を見返した。  
部屋の空気が変わったのを感じ取ったお父さんは遥香に声をかける。

「遥香、お父さんとあっちで遊ぼうか、何して遊びたい？」

「うわあ！　お父さんと遊ぶの久しぶりだね。なにしよう、私お父さんとやりたいこと、いっぱいあるんだ！！」

そう言って遥香はお父さんの手を引いて部屋から出て行った。  
パタン　とドアのしまる音がして部屋は沈黙に包まれる。その沈黙を破ったのは、おじいちゃん。

「さて、まずは先ほどの評価からやろうかの。まずわしの殺気に耐えきった精神力は認めてもいいじゃろう。割と本気で放ったつもりだったんじゃないが。まあ、いいところはそれぐらいじゃの。攻撃も防御もなつてないし型もできておらん、何より戦闘での心構えがなつてないの。……まあそれは当り前か、これから学んでいけばよいことじゃからの。なんにしてもわし相手にその歳ではもったほうじゃ。よく頑張ったの、龍斗」

おじいちゃんの言葉は続く

「お前の場合は気持ちばかりが先走って、少々まわりが見えなくなっているようじゃ。まずは自分のことを客観的に見つめることができるようになること。話はそれからじゃな。……鳴月流を学ぶにはお前はまだ幼すぎる」

「でも……」

「でもない。今のお主に教えることなぞ何一つないわ。わかつたらまずは言われたことをきちんとやることじゃな。もしそれができたなら……、鳴月流第二十三代頭首 鳴月龍一郎、このわしが直々に教えてやろうではないか」

頭首としての風格を感じさせながら最後をそう締めくくったおじいちゃんは ふおっふおっふおっ とわざとらしく笑いながら部屋を出て行った。

部屋にはまた沈黙が訪れる。

教えてやる。おじいちゃんは確かにそういった。すぐに教えてもらえらるはもとから思っていたので、その言葉が聞けただけでも上出来。その上おじいちゃんに直接教えてもらえる。強くなるにはまたとない機会、絶対にものにして見せる。

- - 俺は強くなる。守りたいものは自分で守る。そのための、力

確固たる決意を胸に、少年は小さな一歩を踏み出す。

それは小さな、小さな一歩。それでも少年にとっては確かな一歩。

少年が力を手にするのはまだ先の話

ズン……

地面を揺らすほどの衝撃があたりを突き抜ける。衝撃波で周囲の木々がざわめき、それに驚いた鳥達がざあつと一斉に飛び上がった。再び静けさに包まれる森。

衝撃の中心にいた二つの人影は その場ですこしの休憩を取った後、森を抜けるために歩きだした。

「ふおつふおつふおつ、まさかこのわしが一撃入れられるとは思ってもみなかったぞ」

快活に笑う老人 鳴月龍一郎なりづのりゅういちろうは、隣を歩いている少年 鳴月龍斗なりづのりゅうとに話しかける。

「いいえ、2時間ねばってたった一撃ですよ？ まだまだ精進が足りせん。……というかあの最後の一撃、全力で放ったはずなんですけど。どうして祖父ちゃんは平気で歩いていられるんですか。おかしいでしょう」

そう、龍一郎はつい今しがた龍斗の渾身の一撃をくらって数メートル吹き飛んだ後、背後にあった木にたたきつけられた。

先ほどの音はその時に生じたものだ。

あれだけの音を発する衝撃を生身で受けて、立っていられるものなどまずいない。普通の人間なら即死しているはずなのだ。

それほどの攻撃を受けたというのに、龍一郎は顔に笑みさえ浮かべて平然と龍斗の隣を歩いている。



「ふおつ、鍛え方が違うんじゃないよ。あの程度でわしは倒れん。鳴月なるつき流正統継承者の実力をなめてもらっては困るぞ」

……祖父ちゃん本当に六十歳越えてるんだろつか？　というか、もう人間かどうかさえ怪しいレベルまで到達してるよな……

龍斗は心の中でひそかにそんなことをつぶやく。

「失礼な、わしはれっきとした人間じゃぞ。ちゃんと呼吸しとるし、言葉もわかる。最近ちいつとばけ始めたくらいじゃからの」

一か月前の夕飯が思い出せんのだ。と言って龍一郎は不自然なほど満面の笑みを浮かべる。

「……人の心を読まないでください。というか一か月前の夕飯覚えている人なんていませんよ、普通」

「そうかの？　一年前くらいまでは思い出せてたんじゃが」

「一年前って……　ほんの最近まではできてたんですか。いったい何者ですかあなたは」

「なあに、老い先短いただのボケ老人じゃよ」

「老い先短い老人は朝から孫を傷めつけたりなんてできませんよ」

「何を言う。わしは傷めつけてなどないぞ、稽古と呼べ、稽古と」

「あれのどこが稽古ですか。一步間違えれば死人が出ますよ、あれ」

「心配ないぞ。わしは殺人者になどなりたくはないからな。やって  
もせいぜい半殺し程度じゃ」

「あんなものくらって半殺しで済むはずないでしょうが。嫌ですよ  
俺、この歳で実の祖父に殺されかけるなんて」

そんなことを話しながら歩いていると、だんだんと周囲の木々が  
少なくなっていく、やがて日本造りの長屋のような外見をもつ大き  
な建物が見えてきた。

それは龍斗たちが住んでいる屋敷。その玄関に誰かが立っていた。  
その人物はこちらを振り返ると、小さく手を振って龍斗たちの方  
へと歩きます。

「お祖母ちゃん、おはよう」

龍斗は自分の祖母であるその人、鳴月時代と挨拶を交わす。

「おはよう、ばあさん。今日もいい天気じゃな」

「おお、おはよう、龍斗。じいさんも。ふたりとも、朝からあいか  
わらず元気だねえ。おばあちゃんも少し見習わないと。最近どうも  
調子がよくなくてね」

「何を言うか、ばあさん。わしらはまだまだ長生きせんといかんぞ。  
特にわしは龍斗を鍛えねばならんからの」

「あらあら、あんまりいじめてやるんじゃありませんよ。龍斗はじ  
いさんとは違うんですからね」

「なんじゃ、ばあさんまでわしを悪者扱いしおって。あれはいじめ

じゃなくて稽古じゃというておるのに。いじけるぞ、わし」

「何もこんなことでいじけなくても……それに祖父ちゃんは毎朝いじけているじゃないですか」

「……いいんじゃ、どうせわしの味方なんかだれもないんじゃ」

毎朝行われている光景。……毎朝いじける老人ってどうなんだろうか。

しゃがみ込んで地面にのの字を描き始めた龍一郎の姿を見て、龍斗と時代は苦笑を浮かべる。

そんなことを玄関先でやっている、不意に玄関の引き戸が開かれた。

「おばあちゃん、朝ごはんの準備、できたよー」

そう言いながら姿を現した少女は、朝日の光に一瞬だけ目を細め、時代のそばに龍斗たちがいることに気がつく、ぱつと顔を輝かせてまっすぐに龍斗のもとへと駆け寄り、おもいきり飛びついた。

「お兄ちゃん！ おはよう！ ってなんかまた傷増えてない？ 無茶しないでずっといつも言ってるのに。お兄ちゃんは気にしなくても、私は心配するんだからね」

龍斗に抱きついてきた少女は、妹の遥香。

「おはよう、遥香。祖父ちゃんの相手して無傷でいるのは無理だと思うんだけどね、気をつけてはいるんだがこればかりはどうしようもない。でも、心配してくれてありがとうな」

龍斗は抱き付いたままこちらを向いて頬を膨らませている遥香に微笑みかけ、その頭に手をおいて、髪をすくようにしてやさしくなでてやる。とたんに膨らませていた頬が緩み、幸せそうに顔をほころばせて龍斗の胸に顔をうずめる遥香。

その行動を見て龍斗は再び苦笑する。抱きつかれるのは正直悪い気分はしないが、さすがにこれはどうなんだろうか……

ふと視線を上げると、そこには優しく微笑んでいる時代と、ついさつき復活して ニヤニヤとした笑みを顔にうかべる龍一郎の姿が。

「おうおう、お熱い事じゃな、お二人さん。毎日毎日抱きつかれてうらやましいのう。いっそ結婚しちゃったらどうじゃ？ わしはお似合いだと思うがの」

その言葉を聞いたとたん、顔を耳まで真っ赤に染めて動かなくなってしまう遥香。

龍斗は呆れ顔を龍一郎へと向ける。

「からかわないでください。遥香は俺の妹です」

「なんじゃ、龍斗はまじめでつまらんな。その点遥香は素直でかわいいのう。ほれ、龍斗も自分の気持ちに正直になったらどうじゃ？

」

「世迷言を……、ついにボケ始めましたか」

「じゃからさっき言ったじゃろう。わしはもうボケ老人じゃ」

「ああいえばこういう。祖父ちゃんと話しているときりがないですね」

……祖父ちゃんと話しているものすごく疲れる。

投げやり気味にそう言い放ち、げんなりとしている 龍斗  
孫に軽くあしらわれたー と言いながら高笑いをしている 龍一郎  
抱きついたまま顔を真っ赤に染めて硬直している 遥香  
そんな三人の様子をにこにこ眺めている 時代

鳴月家の朝はいつもおなじように、こうして一日が始まる。

### 3 - 2 ・ 鳴月家

\*

\*

\*

「それにしても、龍斗も随分と強くなったものじゃな。この身に一撃を受けたのは四十年ぶりくらいじゃ」

あの後全く動かない遥香を抱えて家の中に入った龍斗達は、（運んでいる途中に遥香の口から「お兄ちゃんと、結婚……、はううう／＼／＼」とか洩れていたが、あれは何だったんだろう） やつと回復した遥香を交えて朝食をとっていた。

「本当ですか、僕はまだ父さんと撃ち合うことすらできないのに……  
… 父親として息子の成長は嬉しいけど、同じ鳴月流を修める身としては ちょっと落ち込むなあ」

ずず… とみそ汁をすすりながら話しているのは鳴月龍彦<sup>たづな</sup>、龍斗の父親だ。

「でも父さん、八年も頑張ってたった一撃だよ？ いくらなんでも時間かかりすぎだと思っただよね」

この言葉を謙遜で言っているつもりなど龍斗には全くない。実際八年間毎日稽古をつけてもらっていたはずなのに、今朝の一撃まで一度も攻撃が通ったことはなかったのだ。

今までの努力が無駄じゃなかったと証明された。そのことを純粹に嬉しいと感じ、しかしそれで満足はしていない。龍斗の目指すものはもっと上にあるのだから。

「でも、おじいちゃん相手にまともな試合ができるのなんて龍斗ぐらいなんじゃない？ お母さんそれだけでも十分すごいと思うわよ？」

龍彦の隣に座っておかずに箸を伸ばしている女性、かくや鳴月神楽耶はそう龍斗に話しかける。

「そうじゃぞ、龍斗がいないとわしは退屈で死んでしまうわ」

「いやまあ、うれしいのは事実だけど……、祖父ちゃんは絶対俺で遊んでるだけでしょう」

「そんなことはないぞ、今日わしが何度ひやつとしたことか。有効打は一撃だけじゃったが、あと一步のものを数えればたくさんあったぞ。あんなに楽しい稽古は久々じゃった」

「おじいちゃん、それを遊んでるって言うんじゃないかな……。」

食卓に笑いがまきおこる。仲睦まじい家族、近所ではそう噂されているし、実際自分でもそう思う。

ただ家族で朝食を食べているだけなのに、それがとても幸せな時間を感じる。

「あ、ほら、もうこんな時間。そろそろ支度しなさい」

神楽耶の一言を聞いて龍斗が時計に目をやると、時計は7時20分を指していた。確かにそろそろ出たほうがいいだろう。

龍斗と遥香は、近所にあるみかどがくえん私立帝学園の高等部に通っている。

今年で創立50周年を迎えるという歴史を持つ小中高一貫校で、全校生徒は2000人を超え、これまでに多くの優秀な人材を輩出していることで有名な学園だ。

二人とも初等部からここに入学しているが、中等部と高等部には受験入学制度も設けられていて、毎年優秀な人材が入学しているらしい。

学校に行くには少し早い時間と思うかもしれないが、それには地理的な要因が関係している。

学校自体は鳴月家の敷地を出て徒歩10分ほどの位置にあるのだが、問題はその鳴月家の敷地面積だった。鳴月の敷地は常識外れに広い。龍斗たちが住んでいるこの屋敷から、正門までたどりつくのに20分ほど歩く必要があるのだ。

……いったいどれだけの資金があればこんなに大規模な土地が買えるのかなど考えたくもない。しかもそれを現在まで維持し続けるだけの財力を持っているというのが龍斗には恐ろしかった。

以前時代が通帳の整理しているのを横で見ていることがあったのだが、ゼロが並びすぎていて数えきれなかった。銀行が破産したらどうなるのか、と恐る恐る質問してみると、あの程度なくなっても問題ない、と笑顔で返されてしまった。それ以来龍斗は怖くてうちの通帳を見たことはない。

整然と並ぶゼロの恐怖を思い出してかすかに身ぶるいを覚え、一刻も早く忘れるべく急いで支度を始める龍斗。

制服に着替え、教科書の入った鞆を持って玄関に向かう龍斗に、後ろから遙香が追いついてくる。

「まって お兄ちゃん、はいこれ お弁当。中身は開けてのお楽しみ！」



そう言つてきれいに包まれたお弁当を差し出す遥香。

「ああ、ありがとう。でも、さすがに毎日やるのは大変じゃないか？」

高等部に進学するにあつて自分で弁当を作りたいと言いだした遥香は、母親の神楽耶に教えてもらいながら料理の勉強をしていた。龍斗もある程度料理はできるので神楽耶が忙しい時に何度か教えたことがある。始めたばかりのころは危なっかしくて見ているこつちがひやひやさせられたものだが、もともと何でもそつなくこなすタイプの人間だった遥香はみるみる上達していった。

ある朝、「おいしくないかもしれないけど……」と不安そうにお弁当を渡された時はさすがに驚いた龍斗だったが……妹が一生懸命作ったもの、とありがたく受け取った。

学校で友人に冷やかされながら食べてみたのだが……なんで不安そうにしていたのか不思議に思うほどおいしかった。その日家に帰ると、遥香が玄関の外で待っていたのにも驚いたが。

よつぽど感想が聞きたかつたのだらう、不安そうにしている遥香においしかった、と伝えると「じゃあ、明日から私がお兄ちゃんのお弁当作つてあげる！」と言われた。

こんなことがあつたのが今年の春。それ以来、龍斗の弁当は遥香の担当になっていた。

「ほら、お兄ちゃん、早くしないと学校遅れちゃうよ?」

「ああ、今行く」

先に靴をはき終えた遥香は玄関の端に立って兄を待っている。龍斗も靴をはき、二人で玄関を出る。

「「いつてきます」」

意図せずして二人の声が重なり、顔を見合わせて兄妹はくすり、と笑いあう。

家の周りを囲む森へと元気よく駆け出していく遥香

それを追いかけることはなく、しかし見失わない距離を保って歩く龍斗

歩調は違えども 決して離れることをしない二人の姿は、やがて朝の暖かな木漏れ日があふれる森の中へと消えていった……

4 - 1 ・ 牧野と永瀬

「ねえ、お兄ちゃん、いつも思ってたんだけど、なんで私たちの家って学校の反対側に建ってるのかな？ あの家建てたのっておにいちゃんが生まれたときなんでしょ？ だったら正門も学校のほうにあるんだし、なんでわざわざあんなに遠くに建てたのかな？」

家を出て15分ほどたったころ、正門まではまだ少し歩かなくてはいけない二人は、今は肩を並べて歩いていた。

「俺も詳しくは知らないんだけどね。父さんが言うには、あそこに建てるって言いだしたのはどうも祖父ちゃんらしい。一応みんな反対したらしいんだけど…… 遥香も祖父ちゃん性格は知ってるだろ？」

「あー…… うん。一度言い出したら何言っても絶対に止まってくれないよね」

龍斗も遥香もそのことは十分すぎるほどに知っていた。祖父ちゃんのやることは全く理解に苦しむ、と龍斗は苦笑いを浮かべる。

「あらかた俺への嫌がらせってとこだろ。それ以外にわざわざあんな奥地に立てる理由なんかない」

「さすがにそれはないと思うけど…… 絶対ないって言い切れないところがおじいちゃんなんだよね」

「まあな、祖父ちゃんは自由すぎるんだよ。あれだけ本能に忠実に生きてる人間はそういない」

「私もときどきそう思う。でも面白いよね。次は何をするのかな  
ってちょっとときどきするもん」

「俺を巻き込みさえしなければな。見ている分には面白いだろうが、  
一緒に連れまわされる俺の気持ちも少しは考えてほしいよ。何の準  
備もなしに富士登山とか言い出したときはさすがに死ぬかと思った」

「お兄ちゃんあの時本当に死にそうな顔して帰ってきたもんね。お  
じいちゃんはずっこい元気だったけど…… 他にもいろいろあった  
よね。テレビに出たいとか、エベレストに登りたいとか、世界一周  
旅行に行こうとか、自分の会社がほしいとか。」

「世界一周はさすがに断ったけどな。あとは国会議員になりたいと  
か言ってた時期もあったっけ」

「そうそう、あれはほんとにびっくりしたよね。友達に街頭演説し  
てるとことか見られて恥ずかしかったよ。でも当選しちゃったのは  
すごいと思うよ。おじいちゃん意外と人望あったんだね。」

「いや、人望とかの問題じゃないと思うんだが。しかし、確かに全  
くの無名なのによく当選できたよな。本人はテレビに出る夢も叶っ  
て一石二鳥じゃとか呑気に喜んでたっけ。まあ、結局飽きてその  
次の選挙は立候補しなかったけど。」

「すごいよねおじいちゃん。何でもできる私の自慢のおじいちゃん  
なんだよ。」

「何でもできるから余計に困るんだよ。言うだけならかまわないん  
だが、それを実行しようとするからあの人はたちが悪い」

うれしそうにそんなことを言う遙香に　龍斗はげんなりと肩を落とす。

実際龍斗も祖父ちゃんのすごいところは一度言ったことはどんなことであろうと実現させてしまう所だと思っている。

見事に議員に当選したし、そのときにテレビ出演も果たしていた。世界一周も一人で旅立っていったし、ついでにエベレストも登ってきたらしい。

エベレストについてで登った人なんか祖父ちゃんくらいではないだろうか。

気まぐれで設立した会社も、今は父さんが経営を担当していて、現在では『鳴月グループ』と言えば業界内では知らない人がいないほどまでに成長している。その経済規模は一説には小国の国家予算並みとも言われていて、鳴月グループの援助が得られれば、絶対に赤字にならないという噂が広がっているくらいなのだ。

しかもその噂はどうやら事実のようで、実際鳴月グループにかかわる会社には赤字が一切ないと父さんが祖父ちゃんに報告しているのを耳にしたことがある。

鳴月家の万能さにはもう驚きを通り越して呆れるよ、と龍斗はため息を漏らす。

そんなことを話しながら歩いているうちに、二人は木々の隙間から正門が見えるあたりまで来ていた。　徐々に姿を現した正門の両脇に二人の警備員が立っているのも見える。

高さ三メートルほどの鉄製の扉がそびえ立っている正門の様子は、見る者に中世の古城を連想させる造りになっている。これを見てまさかその先に日本風の屋敷が建っているとは誰も思わないだろう。

この正門も龍一郎が発注したもので、西洋風にした理由は、その

ほうがかっこいいから　だったと龍斗は記憶している。

正門から少し離れたところには、二階建てのコテージのような建物が建っている。この建物の一階は警備員たちの休憩所になっていて、二階では電子制御で門の開閉を行えるようになっていた。

実のところ鳴月家には龍一郎という絶対無敵のセキュリティが存在するので、特に警備員など必要はない。しかし龍一郎はこういった仕事をたくさん用意して多くの人員を雇っていた。

警備係、掃除係、食事係、森の手入れ係などその種類は多岐にわたって細かく分断されており、買い物係というただ買い物をしてくれるだけの係なども存在している。

その使用人たちのための宿舎も敷地内に設けられてはいるのだが、住み込みを強制しているわけではなく、単に家が遠い人のための処置だ。

しかしこの宿舎がなかなか住みやすいということで、ほとんどの使用人がこの宿舎を利用していた。そのため鳴月家の敷地内には常時数百人ほどの人が住んでいる状態となっている。

この就職難に対抗するんじゃないー！！　という龍一郎の鶴の一声のもと十年ほど前から開始されたこの雇用体制はなかなか高評価を得ていて、鳴月家で働くこと自体が一種のステータスとして捉えられるまでになっていた。

これだけ盛大に金を使っているにもかかわらず、減るところか逆に貯蓄が増えていっているという事実があるあたりに、鳴月家の経済力の異常さがうかがえる。

龍斗たちが正門に近づいていくと、警備員の一人　髪を赤く染めた男が龍斗たちに気がつき大きく手を振っていた。もう一人の警備員　青髪の青年も振り向いて軽くお辞儀をする。

遥香もそれに元氣よく手を振り返す。

「おう、おはよう遥香ちゃん、龍斗さんも。くうう、いつ見ても絵になる二人だねえ」

「おはようございます、龍斗様、遥香様。少々お待ちください。今正門を開けますので」

龍斗たちをからかう赤毛の男を咎めるように横目でちらりと見て、しかしすぐに視線を戻した青髪の少年は無線機を取り出して開門の指示を出す。

赤毛の男、警備服をだらしく着崩してケラケラと笑っているのは 永瀬

青髪の青年、きつちりと警備服を着こなして落ち着いた雰囲気を放っているのが 牧野

この二人は三年前にほぼ同時期に鳴月家に雇われて、それ以来現在までずっと二人組で朝方の正門警備を担当していた。

それがちょうど登校時間と重なっていたので、龍斗たちはよく二人に話しかけたりしていた。はじめは使用人と雇い主の孫 ということもあり、会話もどこかぎこちないものだったが、それも毎日続けばさすがに慣れるというもので、いつしか永瀬と牧野は使用人の中でも龍斗や遥香に一番親しい人間になっていた。

## 4 - 2 ・ 牧野と永瀬

「おはよう、永瀬さん。毎日朝から大変だよな」

「おはよう、永瀬。……なあ、公私混同を許さないお前の性格は俺もよくわかってるつもりだ。だから呼び捨てにしろとまでは言わないが、いくらなんでも様付けはないだろう」

牧野は非常にまじめな性格で、きっちり仕事とプライベートとを分けて龍斗たちに接していた。プライベートでは気軽に名前で呼び合っている仲なのだが、職務中に会った時だけは、決まって龍斗たちを様付けで呼んでいた。

「いえ、こればかりは変えることはできません。お二人は龍一郎様のご子息、ご令嬢でいらっしゃるのですから」

きつぱりと言い切る牧野に、龍斗と遥香は困ったように顔を見合わせる。

「いや、確かにそうかもしれないが……　ここまで徹底されるとちよつと対応に困るんだよな」

「そうだよ、牧野さん。いつも言ってるけど、呼び捨てでいいんだよ？ 私、様付けは他人行儀でちよつと寂しいな」

龍斗の言葉に相槌を打った遥香の顔からふつ　と笑顔が消え、捨てられた子犬のような表情に変わる。明るい性格の遥香に似合わない表情。その表情は人に少なからぬ罪悪感を感じさせるもので、両親たちが遥香を必要以上に甘やかしてしまうのにもこの表情が関係



していたりする。

家族でさえそんな状態になるのだ、当然牧野が抵抗に成功したことなく一度もない。

「うつ…… い、いえですが遥香さ、また様って言おうとした」

……はあ、わかりました」

様付けで呼ぼうとした牧野の言葉を途中で遮り、悲しみの表情をさらに深くする遥香。この表情が演技でなく素でできるところが遥香のすごいところだと思う、と龍斗は心の中で苦笑いを浮かべる。

この表情には龍斗自身もまだ打ち勝ったことがない。

「様付けはやめます。ですが、敬語は外せませんよ。仕事ですの  
で、これだけは勘弁してください、遥香さん ……これでいいです  
か？」

「むう…… うん、やっぱり敬語は仕方ないよね。じゃあ、まずは  
一歩前進ってことで！」

様付けで呼ばれなくなったというただそれだけのことで、遥香の  
顔からさっきまでの表情が嘘のように消え去り、ヒマワリのような  
笑顔にとって代わる。

さっきまで冷や汗を垂らしていた牧野の顔にも笑みがこぼれる。  
そんな二人の光景に静かに目を細めた龍斗は、ふと何かを忘れてい  
るような気がた。

……誰か忘れている気がする。一体何を忘れているんだろう、と  
周囲を見回してみると、三人から離れたところにうずくまっている  
人影が一つ。心なしかそのあたりだけ空気が重たく感じる。

「……あー、永瀬？ そんなところで何やってるんだ？」

「何やってるんだ？　じゃない！　なんで俺にはだれもかまってくれないんだ！！　まさか遥香ちゃんにまで無視されるとは思ってもみなかったよちくしょう！！」

「あー、いや、その……　済まん。いるのをすっかり忘れていた」

「えっと、ごめんね永瀬さん。ちょっと忙しかったっていうか、その、ね？」

「大丈夫だ、永瀬。私はお前のことをちゃんと見ていたぞ。あえて無視してただけだ」

頬をひきつらせながら謝罪の台詞を述べた龍斗と遥香に反して、牧野は何でもないことのようにそう言い放った。その言葉が永瀬をさらに落ち込ませる。

「牧野は確信犯かよ！　俺の扱いはなんでいつもこうなんだ！　牧野はつまり遥香ちゃんといい雰囲気になりやがってよ！！　うらやましい！　ああうらやましい！！　うらやましい！！　その幸せを俺にもよこしやがれー！！」

途中から意味のわからないことを叫びながら突然ばね仕掛けのように勢いよく立ちあがった永瀬は、牧野につかみかかって前後に揺さぶりはじめる。

「わ、ちょ、まで、待てって永瀬！　苦しい、ゆらさないで、ゆらすなって、うあ……」

がくがくと揺さぶられている牧野の顔からだんだんと血の気が引

いていく。牧野も永瀬の腕をつかんで抑えようとしてはいるのだが、永瀬の動きは全く止まるそぶりを見せない。むしろだんだん力が増しているようにも見える。

「わ、わわ、永瀬さん、ストップ！！　だめだよ！　牧野さん首ががくがくなくなってる！！」

「お、おい、永瀬！　落ち着けて！　顔色悪くなってるから！！  
牧野を殺す気か！」

龍斗はあわてて永瀬を取り押さえる。掴まれていた牧野の襟から腕が離されて、地面に片膝をついてせき込む牧野。

遥香はそのそばに駆け寄っていき、背中をさすりながら心配そうに顔を覗き込む。

「牧野さん大丈夫？　顔色悪いよ？　ちょっと休む？」

「けほつ、うう……　まだちょっと揺れてるかも……」

「ああつ、てめ、このやろっ！！　この期に及んでまだ遥香ちゃんといちゃつく気か！！　離せ龍斗！！　そして牧野は俺とかわれ！！」

「あ、おい！　いい加減暴れんなって。なんでそんなに元気なんだよお前」

「俺は遥香ちゃんのためなら三年は暴れ続けるぜ！！」

「意味がわからん。ほんと朝からテンション高いな、興奮しすぎだぞ。永瀬、ちよつと頭冷やせ」

龍斗はいつまでも抵抗をやめない永瀬の首筋にトン、と手刀を入れる。すると急に永瀬の動きが止まり、ぐったりと龍斗にもたれかかるように全身の力を抜いて気を失った。

ふう、と一息ついて遥香たちのほうへ目をやると、ちょうど回復した牧野が心配そうにしている遥香に　もう大丈夫です、と微笑んでいるところだった。

「心配してくれてありがとうございます。ですが遥香さん、そろそろ学校に行ったほうがよろしいのでは？　いつもの時間を過ぎてしまいましたけど」

「えっ？　あ、本当だ！　お兄ちゃん！　早くしないと遅刻しちゃうよ！！　牧野さん、永瀬さん、行つてきます！」

そう行つてぱつと立ちあがった遥香は、開かれた正門に向かって走り出す。

「あ、遥香、待てって……牧野、こいつどうしようか」

遥香のあとを追いかけてようと、気を失っている永瀬をまだ抱えたままだったことを思い出した龍斗。顔を向けると、牧野がにっこりと微笑んでいた。

「ああ、その辺に捨てておいていいですよ。あとで私が回収してきますから」

「そうか？　じゃあ頼む。それじゃあ、いつてきます」

「ええ、いつてらしゃいませ　龍斗様」

「だから様はやめろ、様は」

明らかにわざと言っている牧野と苦笑しながら挨拶をかわした龍斗は、遥香を追って走り出す。その後ろ姿を表情の消えた顔で見つめる牧野。

「ああ、そうでした。……龍斗」

龍斗が門をくぐろうとしたところで不意に牧野が龍斗を名前で（・・）呼び止める。

「……どうした」

いきなり呼び捨てで呼ばれたことに少し驚きながらも立ち止まって振り返ると、牧野が先ほどの場所で柔和な笑みを浮かべて立っていた。

「いえ、最近どうも遥香様の周囲が騒がしいようでして…… お気を付けください、とだけ」

「……そうか、わかった。ありがとう」

そう短く答えて龍斗は踵を返して走り出す。その背中を静かに見つめる牧野。

「……本当に、お二人ともお気を付けてください。」

ささやくようにつぶやかれた牧野のその言葉を聞くものは、そこにはだれもいなかった。

## 5 - 1 ・ 鳴月龍神一刀流

鳴月龍神一刀流、通称『鳴月流』とよばれる刀を使った戦闘技術が鳴月家には伝えられている。その歴史は古いもので五百年以上も前のものまであり、かつて戦乱の時代においては近接戦闘で鳴月流継承者の右に出るものはいないとまで言わしめたとされている。

その所以が、継承者達の有するおよそ人間とは思えないほどのその身体能力であった。

彼らは一蹴りで幅五メートルもの溝を飛び越えることができる。

彼らは一瞬のうちに十メートル以上の距離をゼロにすることができる。

彼らの放った拳は頑丈に塗り固められた城壁を一撃で粉碎することができる。

人間であることを疑うほどの力をもって瞬く間に城を突き崩し敵兵を無力化していく彼らの姿は共に闘う味方でさえも恐怖を抱かすにはいられなかったという。しかしそれは無理のないことだったというべきなのだろう。

彼ら鳴月流継承者が人間以外の力を行使しているというのは紛れもない事実なのだから。

### - - 鳴月龍神一刀流秘術・開眼

かつてその絶大な力をもって神々を統べる頂点に君臨したとされる最強の龍神『龍王』という存在がいた。

開眼はその龍王の力を術者が取り込むことによって、驚異的な身体能力の向上を可能とする秘術である。

継承者はこの取り込んだ力を制御、収束、循環、発散させること  
によって人知を超えた運動能力をその身にやどす。

鳴月の姓を持つ人間にしか扱うことのできないこの鳴月流唯一に  
して最大の秘術は五百年以上たった今でも脈々と受け継がれている。

その鳴月龍神一刀流第二十五代継承者、鳴月龍斗は現在先を走る妹  
の遥香の背中を追いかけていた。

「遥香、ちよつと待てつて。あんまり急ぐと危ないぞ」

「だって、遅刻だよ！ 私もうあんな罰は絶対に受けないんだから  
！！ あの時はお兄ちゃんにまで迷惑かけちゃったし…… 絶対に  
遅刻するわけにはいかないんだよ！！」

後ろを振り返る余裕もないのか遥香は速度を緩めずにそう叫ぶ。

確かに帝学園はとにかく時間に厳格だった。たとえ一秒でも遅刻  
は遅刻 というコンセプトのもと、遅刻者はその場で生徒指導室へ  
と連行されて必要書類に記入させられたのち罰則を宣告される。

反省文などはまだ楽なほうで、運が悪いときには校内のゴミ拾い、  
中庭の雑草抜き などのもう地獄としか表現のしようがない罰則ま  
で存在している。

さすがに小中高一貫校ということだけあつて、帝学園の敷地面積  
は鳴月家のそれ以上の広さをほこる。ごみ拾いなどはその全域を対  
象とするというのだから、一ヶ月程度では到底終わらない量となる。  
遅刻しただけでここまでやらされるのは世界中を探してもここ帝  
学園ぐらいだろう。

遥香は以前、一度だけ遅刻したことがあった。というのも目ざま  
し時計を三十分だけ遅らせるという仕様もなくてものすごく迷惑な

いたずらをしかけた龍一郎のせいだったのだが、そんな言い訳を聞いてくれるほど帝学園の生徒指導部は甘くない。

当然のごとく遅刻したものは罰が与えられ、このときの遥香は全く運の悪いことに校内ごみ拾いが言い渡された。

目に涙を浮かべ、希望を失った顔で助けを求めるようにこちらを振り返ったあのときの遥香の顔を龍斗は今でも覚えている。罰則を言い渡した教師でさえも罪悪感を覚えずにはいられなかったようで頬をひきつらせながら「まあ、がんばれ」といった声は心なしかうわずっていた。

かわいそうだと思うならはじめからあんな罰則を与えないでほしい。

結局龍斗が手伝いの許可をもらい二人でとりかかったおかげで、二ヶ月弱で全校を回ることができることができた。

二ヶ月間ゴミを拾いつづけるというのももちろんつらいのだが、それよりもすれ違いざまにおくられる生徒たちからの同情の視線に大きな精神的ダメージを与えられた。このゴミ拾いには顔を覚えられるとともに『はずれくじを引いたかわいそうな遅刻者』として校内の有名人になるという嬉しくも何ともないおまけがついてくるのだ。

遥香にとってその出来事はちょっとしたトラウマになっているように、それ以来遅刻したことはない。無論龍斗にとってもいい思い出とは言えないのだが。

「別に迷惑だとは思っていないが…… 確かにあれはちょっとらいよな、何度もやりたいものじゃない」

「でしょ、だったら急がなくなちゃ！ まだぎりぎり間に合うかもし



れないし」

時間を気にしつつ学園へと急ぐ二人。その数メートル後ろに、二人の背中を静かに見つめている男の姿があった。男は金色に輝く（・・・・）両目をすっ、と細めると、音もなく一瞬で龍斗の背後へと移動する。そのまま右拳を振りかぶり少年の後頭部にしっかりと狙いを定めて……

ヒュンッ

勢いよく振り下ろされたときには既に少年の姿はそこになく、拳は空を切る。しかし男の顔に動揺はない。それはあらかじめ予想していたことであり、第一今回の目的は少年のほうではない。ニヤリと口元がつりあげて笑う。

すぐさま本来のターゲット、少女のほうへと意識を切り替え、再び右腕が振りあげられる。前を走る遥香では後ろで起こっていることに気づけない。それにたとえ気づいたとしても避けるすべを持っていない彼女では、普通ならばこの一撃で確実に意識を刈り取られるはずであった。

そう、普通ならば（・・・・）

ゴッ という打撃音とともに後頭部に衝撃が走り、バランスを崩した体がアスファルトへたたきつけられる。

自分の身に何が起こったのかが認識できない。

倒れている、自分が？ まさか、そんなはずは……

うつぶせに倒れたままわずかに頭を動かして周囲を確認すると、二対の靴が目にとまった。そのまま視線を上に向けて二人の顔へと

目線を上げていく。

そこに立っていたのは男同様金色に（・・・）瞳を輝かせている龍斗、そしてその背中に守られるようにして遥香が立っていた。

彼女は何が起こったのか分からないという感じの表情で、疑問と戸惑いの表情を浮かべたまま硬直している。

5 - 2 ・ 鳴月龍神一刀流

「ふむ、みごとじゃ。まさか返り討ちにされるとは思ってもみなかつたの」

何事もなかったかのように襲撃者、龍一郎は平然と起き上がる。その動作にダメージを負っておるような様子は全くなく、むしろ笑みを浮かべる余裕さえ持っていた。

「ふおっふおっふおっ、今日は本当に楽しい日じゃな。まさか二撃目をこんなにあっさり入れられるとは。全く予想外じゃった」

体についたわずかな泥をはらいながら愉快そうに笑う龍一郎に龍斗はいかにも迷惑そうにして顔をしかめる。

「何が楽しい日、ですか。いきなり襲ってこないでくださいよ。しかも『開眼』まで使っているし、全くいたずらにもほどがありますよ」

「まあまあ、よいではないか。結局は無事お前が守りきったんじゃし。それにその大切な妹を守ることがお前の目的だったはずじゃが？」

「それはそうですけど、だからと言ってわざわざ襲ってくる必要がどこにあるのかと言っているんです。ましてや開眼まで使う必要がどこにあるっていうんでうか。遥香が怪我でもしたらどうするつもりですか」

「そこは心配しておらんよ。遥香のことはお前がしっかり守ってく

れると信じておるからの」

「まさかそんな信頼の言葉を襲ってきた人間の口から聞く日が来るとは思ってもみませんでした」

「そうじゃな、言ったわし自身もびつくりしとるところじゃ」

「……遊んでますよね、絶対俺で遊んでますよね。もういい加減やめてくださいよ。いい年していたずら好きとか恥ずかしく思わないんですか」

「なにが恥ずかしいものか。楽しいことをして何が悪い？ わしはあと二百年はお前たちのことをいじり倒すつもりじゃからの」

「二百年で、死んだ後もいじられ続けられるんですか、俺」

龍斗は深くため息をつき、呆れたようにがっくりと肩を落とす。同時に金色だった瞳が普段の黒に戻っていく。それを満足そうに見ていた龍一郎の瞳からも すつ、と金色の輝きが失われていく。

「うむ、開眼の制御はよく出来ておるの。ずいぶんと安定しておるようじゃ」

腕を組みながらうんうん、とひとり満足そうにうなずいている龍一郎に龍斗は曖昧な笑みを浮かべる。

「まあ、確かに自分でも上達したとは思いますがね。それでもまだ祖父ちゃんのようにはいかないですよ。それにアキアの制御に関しては父さんのほうが俺より数段上ですし」

「無理もない。あいつは制御だけを見ればわしに匹敵するものを持つておるからの。じゃが、総合的に見ればやはりお前のほうがずっと上じゃよ。普通はお前ほどの域に達するまでに最低でも二十年はかかるんじゃないぞ。それをたった八年でたどりついたお前は十分すごいと思うがの。なにしろ五百年を超える鳴月流の歴史の中でも前例がないことなんじゃぞ。このわしでさえ十年はかかったんじゃない。そういう面で言えばお前はすでにわしを超えとるんじゃないよ」

「ほめられて悪い気はしません、まだまだ『龍眼』（りゅうがん）には遠く及ばないんですよ」

「それこそ当たり前のことじゃよ。龍眼は開眼の完成形にして鳴月流の目指す最終目標じゃ。過去五百年間で龍眼成功者は始祖・玄十郎様とわしのたった二人しかおらんのじゃぞ。そのわしでさえも四十年かけてやっと辿り着いた極致。まだ十六やそこの若輩者がそう簡単に会得できる代物ではない」

「鳴月流の最終目標、ですか。はたして俺にたどりつけるかどうか」

「そうじゃの、長く険しい道になるじゃろう。修練の過酷さも開眼の比ではない。比べるのが馬鹿らしくなるくらいにの。並の人間ではおそらく精神が持たんじゃろう。まあせいぜい頑張ることじやな。なに心配はいらんよ。お前は三人目になりうる資質を持つておる。努力次第ではいずれたどりつくこともできようぞ。そんなことよりも龍斗よ、学校へは行かなくていいのか？あと五分で遅刻確定じゃが」

真剣な表情から一転、意地の悪そうな笑みを浮かべる龍一郎の発した遅刻という言葉には、とようやく我に返った遥香がとたんにあわて始める。

「そうだ！ お兄ちゃん遅刻！！ ううう、もう絶対間に合わないよう……」

目にいっぱい涙を浮かべて遥香はその場に崩れ落ちてしまう。

「こら、龍斗。遥香を泣かせたらだめじゃろう。かわいい孫娘を泣かせる輩はわしが成敗してくれよう」

「……なんで俺が責められてるんですか。遅刻しそうなのは祖父ちゃんか襲ってきたせいでしょうが」

「はて、何のことか？ わしに言われてもさっぱりじゃが」

「……もういいです。覚悟しておいてくださいよ。帰ったら全力で三撃目をたたきこんでやります。遥香、行こう。急げばまだ間に合うかもしれない」

「だ、だって、もう五分切ってるんだよ。ごめん、お兄ちゃん、またゴミ拾い、ああ、あの悪夢が……」

もはやまともに言葉を発することもできないぐらいに落ち込んでしまった遥香に、龍斗は苦笑しながら近づいていく。そのまましゃがみ込んでいる遥香の背中とひざ裏に腕をまわすと、そのまますつと軽やかに持ち上げる。

俗に言うお姫様だっこのかたちで。

「ふえ？ え、ちょ、ちょっとお兄ちゃん！？」

あまりにも唐突すぎる兄の行動に驚きとそれ以上の羞恥で激しく

動揺し顔を真っ赤に染める遥香に、龍斗はにっこりと微笑むと、その目に金色の光が宿る。

膨大な量のエネルギーが体内で循環を始めたことで、その余波を受けた周囲の空気が塵気楼のように揺らぎを生じさせる。

「それじゃ、祖父ちゃん。行ってきます」

「おう、気をつけてのー」

ひらひらと手を振っている龍一郎に背を向けた龍斗は学園のある方角へと向き直る。

「さて、遥香、しっかりつかまってるよ。ちょっと揺れるかもしれないから」

戸惑う遥香を抱えたまま力強く地面を蹴った龍斗の体が数メートル上空に舞い上がる。そのまま近くにあった家の屋根の上に着地すると、再び跳躍を繰り返して次々と屋根の上を飛び移り、あっという間にその姿は小さくなっていく。

「さて、では来るべきときのためにウォーミングアップでもしておかのー」

やがてその姿が見えなくなるまで見送った後、愉快そうに笑う龍一郎の姿も静かにその場から消えていった。

6 - 1 ・ 帝 兼 継 (前書き)

今回は若干文字数が少なめです。

というのもちょうどよく切れるタイミングがなかなか見つけれないんですよ (笑)

自分の書いた作品の話の切れ目がわからない私って一体……



腕の中の遥香にできるだけ衝撃が伝わらないよう細心の注意を払いながら龍斗は学園へと走っていた。いや、走っていた。というのは適切ではないかもしれない。

正確には立ち並ぶ家の屋根から屋根へと高速で飛び移って移動している。

開眼による身体能力の強化を受けている龍斗は生身で時速五十キロオーバーという自動車並みの移動速度を可能とする。

それだけの速度を出せば体に受ける風圧も相当のものになるはずなのだが、彼の周囲にはせいぜいそよ風程度の風しか吹いている様子はない。この不可思議な現象も開眼によるもので、一度体内に取り込んだ龍王のエネルギーを周囲に放出することによって吹きつける風を相殺しているのだ。

同時に空気抵抗も大幅に軽減することができ、さらなる高速移動が可能になるという追加効果もある。

しかしいくら軽減しているとはいえっても完全にゼロにすることはできないし相応の負荷もかかる。遥香のような普通の人間ではこの風圧軽減効果がなくなつた瞬間体が潰れてしまう可能性もゼロではないのだ。万が一にも制御を手放すようなことがあつてはならない。細心の注意を払いながら龍斗は腕の中で小さくなっている遥香を見て、気づく。

「遥香、何か顔が赤いようだが大丈夫か？ 熱があるとか？」

「え、だ、だいじょうぶだよ。べ、別に体調が悪いとかじゃないから」

「そうか？　一応風圧は防いでいるけど、もつと速度緩めたほうがいいかな」

「う、うん。ほんとにだいじょうぶだよ。全然平気だから」

「そうか、ならいいんだが。何かあったら遠慮なく言うんだぞ」

「う、うん、ありがとう」

少ししどろもどろになってしまったがなんとか会話が続けられたことに遥香は安堵し、龍斗に気づかれないうちにほっ　と息を吐くいきなりお姫様だっこされたと思ったら次の瞬間には空を舞っていた。

普通は後者のほうが大いに問題とすべき出来事なのだろうが、遥香にとっては前者のほうが断然重要視すべき問題だった。

龍斗は妹の遥香から見ても美少年と称すべき容姿を持っていた。さらさらの黒髪に整った顔立ち、すらっと伸びた手足はしなやかな筋肉に覆われていて、体の線は細いがか弱さは全く感じさせない。その上龍一郎の無茶苦茶な教育によって成績は学年でも一、二を争うほど優秀で、人当たりのいい性格もあってか学園ではアイドル的な扱いを受けることも少なくなかった。

そんな性格も容姿も完璧な人物の顔がすぐそこにあって、しかも自分に柔らかな笑みを向けてくるのだ。いくら妹だからといっても動揺してしまうのは無理もなかった。

「よし、このままいけば……　遥香、ちょっと揺れるぞ」

そんな遥香の心情を知らない龍斗は軽く力をためて今までより大

きく跳躍すると、足をばねにして衝撃を緩和しながら学園の門の前へと静かに着地する。

その間腕の中の遥香には揺れるどころかいつさい衝撃が伝わっていない。

「うん、何とか間に合ったな。いつもよりちょっと遅いぐらいかな？」

「う、うん。それはよかったんだけど……その、えっとね。そろそろおろしてくれると、うれしいかなあって」

「あ、ごめん。いきなり抱き抱えたりして嫌だったよな。今おろすから」

龍斗はゆつくりと遥香を地面に立たせると急な運動によって少し乱れた制服を整える。

「え、あ、違うよ！別に嫌とかそんなんじゃないで、むしろその、うれしかったっていうか……って違う！それでもなくて、ええと、あの、あううう」

「あー……まあ、とりあえず行こう遥香。その話は落ち着いてからでも聞かせてくれればいいから」

あたふたと齒切れの悪い返答を返す遥香の様子になんとか今朝の出来事を思い出して、とりあえず教室に向かうことを提案してみる。さすがにここで硬直されたら困ってしまう。

「そ、そうだね。早く教室行こう」

ゆつくりと歩き出した龍斗のあとを遥香がとてとてとついていく。  
龍斗は二年、遥香は一年なので学年は違うのだが目的地は同じ高等部校舎なので二人で並んで歩く。

## 6 - 1 ・ 帝 兼 継（後書き）

サブタイトルの人物が全く出てきませんでした。

次回もまだ出てこない予定です。

……こないいい加減にサブタイトル決めていいんでしょうか？

「あれ、鳴月じゃないか。珍しいな、いつもはもっと早く来てなかったっけ」

不意に背後から声が聞こえて今日は後ろからよく声がかけられるな、と思いながらも振り返るとグレーのスーツを着た三十前後くらいの男がこちらに向かって歩いてきていた。

その顔に見覚えがないのでおそらく鳴月とは遥香のことなんだろう、と龍斗は結論付ける。

「あ、おはようございます真辺先生<sup>まなべ</sup>」

真辺、と呼ばれた男はさわやかな笑みを遥香に向けていた。遥香は真辺に軽くお辞儀をして挨拶をする。

「ああ、おはよう。で、どうしたんだ？ 寝坊でもしたのか。いつでもまだ遅刻するってほど遅くもないけど」

「いえ、それがちよつと今日はいろいろとありまして……」

「はは、そうか。なんだかよくわからないけど大変だったみたいだね。まあ間に合ってよかったじゃないか」

曖昧な表情で言葉をにぎした遥香に真辺は不思議そうな表情を浮かべるが、それ以上追求することはなくそこでその話を打ち切ると、遥香の隣に立っていた龍斗のほうへと顔を向けた。

「君ははじめまして、だね。もしかして鳴月の彼氏さんとか？」

「ち、違いますよ！ そんなんじゃないくて、わ、私の兄です」

「高等部二年、鳴月龍斗です」

うろたえる遥香の言葉を受けて、龍斗は軽く一礼する。

「ああ、君が。僕は妹さんのクラスの担任をやっているんだ。名前は、さつき鳴月が呼んでいたね。真辺という。よろしく鳴月。おつと、そういえばどっちも鳴月だったか。同じ呼び方じゃ紛らわしいよね。君のことは何と呼べばいいかな」

「では名前の方でお願いします。他の先生方も皆そう呼んでいます」

「そうか、じゃあ龍斗君で。いやあ、それにしても会えてうれしいよ。君のことは鳴月からよく聞いている。なんでも強くてカッコいい自慢のお兄さんだとか」

「やめてくださいよ。俺は別にそんなに大層な人間じゃないんですから。……ところで、先生はどうしてこちらに？ 確か毎週月曜は八時から職員会議が入っていたはずですが」

「そんなことよく覚えているね、でも残念、今日は九時からなんだよね」

「え？ でも九時って授業はじまっていますよね。なのに職員会議やるんですか？」

「ああ、ちよつといろいろあってね。急に本部の経営陣が来ること

「 became たらしいんだ。あまりに急な話だったからその打ち合わせをやらなきゃいけないんだよ」

「経営陣、というと運営本部の人たちのことですか？」

「いや、今回はそのさらに上が来るらしい。なんでも帝グループ経営統括理事会の理事達が来るという噂だよ」

「経営統括理事会、ですか。どうしてまたそんな上層部の人たちがここに？」

「それが僕にもわからないんだよ。本来学園関連のことは運営本部に一任されているはずなんだ。理事会の人がここに来る理由はないと思うんだけど」

帝グループ経営統括理事会とは日本有数の大企業である帝グループの最高決定機関で、日本全国に散らばる帝グループ提携会社の経営全般を管理している機関である。

その中でも特に学園の運営を担当しているのが帝学園運営本部。学園に関する事柄はすべてこの運営本部が担当しているので、この学園にその上位組織である理事会の人間が来るというのは普通は考えられないことだった。

「ひょっとして、帝国祭の何かかな？ そろそろ私たちも準備始まるよね」

「帝国祭？ ああ、そういえばもうそんな時期だよな。でもたかが学園祭にわざわざ大手グループの経営陣たちが興味を持っているとも思えないんだが」



「そうなんだよね、全然目的が分からないから僕たちも困っているんだよ。こんなことは前例がないからすっかり混乱しちゃってね。何せあの帝兼継<sup>かねつぐ</sup>が直々に学園を視察するって言うんだから驚きだろ？」

「帝兼継、というところあの経営統括理事長の？」

帝兼継の名を聞いた龍斗は顔をわずかにしかめる。

たった一代にして現帝グループの体制を築き上げた凄腕実業家にして、現在もそのトップに君臨し続けている帝グループ本社の代表取締役社長。その経営手腕は世界でもトップクラスと謳われ、彼の影響力は政治業界にまで及んでいると噂されるほどの人物だ。

それに兼継はプライドが高く自身を腕を信じて疑おうとせず、ほしいものは力ずくでも手に入れるという独占欲の塊のような人間だという話を聞いたことがある。

龍斗としてはあまりにかわりあいを持ちたくない人間の一人だった。

「うーん、でもそんなすごい人なら一度でいいから会ってみたいかも」

「はは、鳴月は意外と恐ろしいことを言うんだな。僕はできることなら一生会いたくないよ」

笑顔でそんなことを言う遥香に真辺は苦笑いを浮かべる。しかしすぐに何かに気がついたように後ろを振り返った真辺の表情が真剣なものに変わる。

その表情の指す意味を瞬時に理解した龍斗がその目線の先を追っていくと、ちょうど黒い車が数台校門をくぐって入ってきたところだった。

よく見ると黒塗りの自動車群は一台の漆黒のリムジンを取り囲むように列をなしており、政府の要人でも護衛しているかのような雰囲気漂っていた。明らかにあれは生徒を送ってきましたという感じではない。

「まさか、もういらしゃったのか！？　まだ時間まで二時間以上もあるのに！！」

真辺が顔を青くしながら驚愕の声を上げる。それを知ってか知らずかその場から動けずにいた三人の前で黒塗りの一団は静かに停車すると、そのうちの一台　リムジンの窓が緩やかに開いていく。

そこから顔をのぞかせたのは見る者を震え上がらせるような鋭い眼光を放っている老人の姿だった。

老人は立ち尽くす三人に視線を向けながらしわがれた声低い声で言い放つ。

「邪魔だよ君たち。私が通るんだ、道をあけるのは当然の義務だろう。そんなところで突っ立ってないでさっさとどっかに言ったらどうだ。私の視界に入らないでほしい。目障りだよ。」

どこか聞く者に従わなくてはいけないと思わせるような響きを持った老人の声を聞いて、真辺と遥香はびくつと肩を震わせる。龍斗だけが老人の目を静かに見つめ返している。大の大人でさえ震え上がっているというのにただの生徒が全く動じた様子もなく自分の目を見つめ返してきたことに、老人はすつと　目を細める。

「……あなたが帝兼継、ですね。それで、俺たちに何かご用がおりで？」

静かに紡がれた若干の敵意のこもった龍斗の言葉に老人　帝兼継

はわずかに押し黙る。

「……君は鳴月龍斗だね。ということはこっちが鳴月遥香。ほう、写真で見るよりなかなか可愛い女の子じゃないか。あの古いぼれにはもったいないな。……どうだ、お嬢ちゃん。うちに来ないかね？ 私たち帝一族はあなたを歓迎するよ」

突き刺す様な目線で全身を舐めるように見られた遥香はびくつと肩を震わせておびえるように後ずさる。

目をそらしたいのにそらせない。奇妙な拘束力を持った視線に遥香は思わず体を守るように肩を抱こうとするがそれすらも許されない。

別に睨まれているわけではない、ただ目を向けられているだけ。それなのに、たったそれだけに体が石のように硬直してしまっていることを聞いてくれない。

怖い、この人何か違う。

得体のしれない恐怖におびえる遥香の視界が不意に何かによってさえぎられ、老人の顔が見えなくなる。恐る恐る顔をあげてみると、龍斗が遥香を背中にかばうようにして立っているのがわかった。

兄がそばにいてくれる、私を守ろうとしてくれている。

たったそれだけのこと。兼継の視線はまだ遥香を捉えたままだったが、遥香は自分の中で恐怖心がゆっくりと溶けてなくなっていくのを感じていた。

「何の用事か、と聞いているんです。くだらないことを言っていないで質問に答えてください」

「……うるさいな。君に話しかけてはいないんだよ。邪魔をするんじゃない。それよりも……私に命令をする気かね？ 君はこの私にそんな口をきいてただで済むとでも思っているのか？」

「どうやら何も用事はないようですね。それでしたら俺たちはこれで失礼させていただきます。行こう、遥香」

軽く形式だけの礼をして龍斗は遥香の手をつかんでその場から去ろうとする。

## 6 - 3 ・ 帝 兼 継

「待ちたまえ、私へのその不遜な態度は謝罪に値するぞ。謝罪の言葉くらいは置いていてもいいだろう」

その言葉を合図に周囲に止まっていた車が一齐に龍斗たちの逃げ場をふさぐように移動した。

それぞれの車からは黒いスーツを着た屈強な男たちが二人ずつ、計十人ほど出てきて、あっという間に龍斗たちの周りに黒い壁が出来上がる。

「ずいぶんと物騒ですね。脅しのつもりですか」

遥香を背中にかばいながら龍斗は兼継にうつとうしそうな視線をおくる。

「ふん、この後に及んで私にそんな目を向けるとは何と愚かな。素直に謝っておけばこんなことにはならなかったものを」

「そう言われましても、俺にはもともと謝る気などありませんが」

本当に困ったような顔をする龍斗に兼継の頬がひきつる。

「……そうか、なら仕方ない。それではその可愛い妹君を謝罪の証にいただくことにしようか。もともとそのつもりで来たのだしな。なに別に取って食おうというわけではないよ。ちょっと私の抱えている仕事をお手伝いしてもらおうと思っただけなんだから」

二人を取り囲む男たちの中から二人が前に出てきて、遥香の手を

つかもつと手を伸ばす。

自分をとらえようと伸びてくる手に、遥香は恐怖で目を固くつぶる。ほかの男たちも龍斗を遥香から引きはがそうとして押し寄せる。一斉に動き出した男たちを興味のなさそうに一瞥した龍斗は特に慌てた様子もなく静かにため息をつく。

「何でも思い通りになると思っているのならそれは大きな間違いですよ。あなた方が遥香に触れることは絶対に許されない」

ゴバツ、という空気を切り裂く音とともに衝撃波が吹き荒れる。

襲いかかるうとしていた男達は正面から風の奔流を受けて吹き飛ばされ、自分たちが降りてきた車へと次々に激突していく。その全員が一撃で意識を刈り取られており、再び立ち上がるうとするものは一人もいなかった。

衝撃波の中心に立っているのは金色の光をその目に宿した龍斗。その脇には目をつぶっていたために何が起こったのか理解していない遥香が龍斗に守られるようにしながら困惑の表情を浮かべていた。

「あなたは自分が一体誰に手を出そうとしてるのかを本当に理解しているのですか。愚かなのはあなたの方だと思いますが。遥香のことを俺たちがどれほど大切にしているのかをあなたは全く理解していない。もし本気で言っているなら鳴月家は総力を挙げてあなたを潰しにかかりますよ。聡明なあなたならこの意味がわかるはずだ。俺はおとなしく帰ることをお勧めしますよ。今回のことは特別に彼らには伏せておきますから」

冷めた目線を向けながら淡々としゃべる龍斗に兼継は顔を真っ赤にして憤慨する。

「ふざけるな！ 学生ごときがこの私に命令するんじゃない！ ど

こまでも虚仮にしおつて！ 私を誰だと思っている！ 帝グループ  
経営統括理事長 帝兼継だぞ！！」

「知っていますよそれぐらい、あなたは有名ですからね。それで、  
だから何だっというんですか？ 自分が一番偉いとか言いたいんな  
ら他で言うてください。正直かなりうつとしい」

「き、貴様！！ 小僧が調子にのりおつて！ 何をしておる！！  
こいつをはやく始末しろ！！」

兼継が怒鳴り散らすと、正門のほうからさらに何台もの車が入っ  
てきてあつという間に龍斗を取り囲んだ。

数十台を超える車のすべてから先ほどよりも屈強な男たちが降り  
てくる。先ほどのボディガードたちとは違う、今回は護衛対象を  
守るのではなく相手をたたきつぶすために鍛えられた男たちだ。

黒服姿の大男が並んでいるという光景はそれだけでなかなか威圧  
感がある。ついに恐怖に耐えられなくなって震え始めてしまった遥  
香の隣に移動し肩を優しく抱きながら龍斗はざつとあたりを見回す。  
龍斗一人に対して相手はざつと数えても三十人以上はいる。それ  
だけの人数差を目の前にしても龍斗の余裕の態度は一切崩れてはい  
ない。そのことがさらに兼継を激怒させる。

「ええい、なんでもいい！！ 早くこの小僧を黙らせる　！！」

兼継の絶叫に、しかし男たちは誰ひとりとして動こうとしない。  
いや、動けなかった。彼らは敵を叩き潰すために鍛えられたプロフ  
ェッショナル、

しかしだからこそわかってしまった。目の前の少年はその存在を  
もって男たちに案にこう告げているのだ。

これ以上近づくな、と。

少年から発せられている男たちのものとは比べ物にならないほどの圧倒的な威圧感。それが彼らをその場に縛り付ける。近づけば間違ひなくやられる。あと一歩でも近づこうものなら痛みさえ感じる暇もなく一瞬で意識を刈り取られることになる。と感覚と経験で悟る。否、悟らされる。

男たちと少年の間にはそれだけの實力差があり、そしてその差は何があっても絶対に埋まることはない。

かなわない、わかってしまったが故に男たちは動く事が出来ない。

「な、何をしている！！ さっさと始末せんか！！ お前らが始末されたいか！！」

命令を下したのに動こうとしない男たちに兼継はさらに顔を真っ赤に染めて興奮しながら怒鳴り散らす。その兼継を完全に無視して龍斗はおもむろに上空を見上げる。

「ああ、大変ご立腹のところ申し訳ないんですが、どうやらタイムアップみたいですよ？」

龍斗のつぶやいたその言葉は周囲に響き渡ったプロペラ音にかき消され、直後に強烈な風が吹き荒れる。その風にあおられて龍斗を囲んでいた男たちはバランスを保てずに地面に片膝をついて風を起こした物体、ヘリコプターを見上げる。

その側面には黄色の塗装で『鳴月』の二文字が書かれていた。



## 6 - 4 ・ 帝 兼 継

「鳴月？ まさか、鳴月龍一郎か！？ いったい何の用だ！！」

兼継の声にこたえるようにへりのハッチが開かれて、その中から誰かがパラシュートなしで（・・・・・・）飛び降りてきた。三十メートルほど上空から飛び降りてきたというのに、その男は階段を二、三段飛び降りただけのような動作で軽々と地面に着地すると背筋を伸ばして驚愕の色を隠し切れていない兼継へと向き直る。

「父さんでなくて残念でしたね。いや、今回は幸運だった、と言っべきかな？ 直接会うのは今回で何度目になるんでしょうか。十回目？ いやもつと少なかつたかな。まあ、ともかくお久しぶりですね、帝兼継さん」

へりから飛び降りてきた男はにつこりと人当たりの良さそうな笑顔で兼継へと向ける。

「……なんだ、鳴月龍彦ではないか。貴様に用はないぞ。何をしに来た」

男の顔を見たたん、兼継はつまらなそうに顔をそむける。その態度を見た龍彦は困ったような笑みを浮かべた。

「そうですか、それは何よりです。私たちはなるべくあなたとはかわりたくありませんから。ですが今回はあなたに用はなくてもこちらには重要な用事がありました。……うちの遥香が知らないおじさんに家へ来ないか、と声をかけられたという連絡が入りましたね。父親として娘の安否を確認するために急いで飛んできたんですよ。」

不審者に狙われた娘を心配しない親はいないでしょう？　あなたならご存知じゃないかと思ひまして」

「ほう、そんなことがあったのか。しかし私は知らんな。なぜ私にそんなことを聞く？」

「知らない？　本当にそうでしょうか。ではそこらじゅうに転がっているこの屈強な男たちはいったい何なんでしょうね」

楽しそうに、しかし目だけは一切笑っていない笑顔で龍彦は兼継を問い詰める。

「……そいつらが勝手に暴走しただけだろう。私は関係ない」

「はは、何とも都合のいい言い訳ですね。ですがこの状況を見るにその暴走を止めたのはどうやらうちの息子のように感じますが。雇い主であるあなたは止めなかったんですか？　しかもそのあとに来た人間も混ざっていますよね。底で膝をついている方々とか」

「だから私は知らんと言っている。そいつらが勝手に暴走したんだ。何度も言わせるな、しつこいぞ鳴月龍彦」

「そうですか、あくまでもお認めにはならないと。わかりました。それならばこちらにも考えがありますよ。」

そう言つて携帯電話を取り出した龍彦はどこかと連絡を取り始める。

「……ええ、そうです、はい。……そうですか。ええ、ではお願いします」

「……貴様、いったいどこと連絡を取った」

ギラギラと両眼を不気味に輝かせながら睨みつける兼継に、龍彦はボタンと携帯を折りたたんでポケットにしまいながら何事もなかったかのように平然と答える。

「なに、大したことではありませんよ。ちょっと知り合いに頼みごとをしただけです」

「何？」

龍彦の返答の意味を測りかねた兼継は疑問の声を上げる。しかしその答えはすぐにやって来ることとなった。

突如兼継の携帯が鳴り響く。ちら、と横目で携帯を見ると、兼継は龍彦を睨みつけたまま通話をオンにする。

その瞬間通話口から大音量で叫び声が聞こえてきた。

『大変です代表！！ 帝グループ提携企業の帝重工の株価が暴落しています！！』

「何だと？ 今朝見たときはそんな兆候はなかったが、何かの間違いではないのか？」

『そ、それがほんの今しがた急に暴落を開始しまして、たった今六割を切ったところで…… 待ってください！ な、なんだこれ、はやすぎる！ もう五割を切ります！！』

「ばかな！ いきなり下落を始めただと！ ありえん！ そんなことがあってたま…… まさか貴様か！ 一体何をした！！」

「何のことでしょうか？ 私は何もしていませんよ、私は。先ほどのあなたと同じようにね」

「……出せ。一度本社に戻る」

兼継は何か言いたそうに口を開け、しかし何も言うことなくその口を閉じる。

その後忌々しげに低くつぶやくと、苦虫をかみつぶしたような顔をした兼継を乗せたリムジンは静かな挙動で発進する。

「まったく。あの人もなかなか執念深いなあ。まさか直接本人に会いに来ると思わなかった。……で、君たちはいつまでそこに転がっているつもりだい？」

学園を出ていくリムジンを見送りながら龍彦は苦笑してつぶやいた後、周囲をぐるりと囲んでいる男たちに意識を向ける。

何気なく放たれた言葉のようであるがその実、暗にさつさと帰れ、と言っているのがだれが聞いても理解できるような声色だった。

それを聞いた男たちはまだぐったりと意識を失っている仲間を車に押し込むと、逃げるようにして学園を出るとリムジンを追いかけて行った。

やっと周囲が静かになったところで、もう大丈夫だと判断した龍斗は開眼を解く。

「やっと行ったか。怖い思いをさせたね、ごめん遥香。だいじょうつと」

安心させようと語りかけながら後ろを振り返ると、ちょうど遥香がその場に崩れ落ちようとしているところだった。

龍斗が慌ててその体を支えようとしたおかげで倒れることはなかったが、遥香はそのまま地面にしゃがみ込んでしまう。

「えへへ、ごめんねお兄ちゃん。ちょっと立てないかも」

顔を真っ青に染めながらも力なく笑おうとする遥香を見て、龍斗は龍彦のほうをちら、と横目で見る。

その意味するところをしっかりと理解した龍彦は、今にも倒れそうになっている少女の正面にしゃがみこんでその肩にそっと右手を添える。

「ちょっと疲れちゃったみたいだね、でも大丈夫だよ。すぐに良くなる」

龍彦が静かに目を閉じるとその体内に龍王の力が満たされる。

そこに龍一郎や龍斗が開眼時に放つような威圧感はなく、むしろ優しく包み込むような安心させる何かが感じられた。やがて龍彦によって掌握されたエネルギーはその質を変化させながら右腕へと収束され、そのまま遥香へと流れ込んでいく。すると遥香の顔色が見る間に戻って行き、こわばっていた表情も徐々にほぐれていつも通りの穏やかな表情を取り戻していく。

遥香の顔色が回復しきったところでゆっくりと両目を開けた龍彦は、遥香の肩から右手を離して彼女の頭の上にぼんっ、とのせると優しくなでる。そしてゆっくりと立ち上がると、龍斗のほうに向きなおる。

「さて、実は重要な会議をすっぱかしてここまで来てしまったね。ちょっと急いでいるんだ。龍斗、後は頼んだよ」

「わかった。父さん、ありがとう」

「おいおい、親が娘の心配をするのは当然のことだろう、もちろん龍斗のことね。だからお礼なんかいらないよ。それじゃ、本当に行かないとまずいから。行ってきます」

「ああ、行つてらっしゃい」

「お父さん、気をつけてね」

龍彦は大きく頷くと上空で低空飛行を続けていたヘリを見上げてその距離を確認する。そのまま膝を曲げて反動をつけると勢いよく地面を蹴り跳躍する。

ふわりと宙を舞った龍彦の体は、吸い込まれるようにしてヘリの中におさまると、ハッチを閉じたヘリコプターは大きく旋回して飛び去って行った。

「あっははは、そら大変やったなー。ホンマ龍斗と一緒にいると話のネタに困らへんわ」

「笑うなよ、人事だと思って。結構危なかったんだぞ。父さんが来なかったら今頃どうなっていたか」

「ははは、すまん。と目の端に涙を浮かべながら笑いをこらえている少年に龍斗は疲れたため息をつく。

帝学園高等部校舎、その二年生の教室内で龍斗は前の席に座っている少年 しのさきかずま 篠崎一馬と話していた。

「せやけど結局は龍斗一人でもなっとなんやない？ 『あれ』使った龍斗は無敵やんか」

あれという単語にわずかに不思議そうな顔をした龍斗だったが、すぐにその意味を理解すると首を横に振った。

「いや、あの状況で遥香を守りきる自身がなかったんだよ。開眼は力のセーブが難しいから。下手に動いて自滅するのだけは避けたかったからな」

「あー、そやったな。龍斗は遥香ちゃんにゾッコンやもんなー。自分のせいで遥香ちゃんに傷がつくのはやっぱ許せへんか。あー、なんか羨ましくなってきたわ。オレも遥香ちゃんみたいなカワイイ妹がおったらよかったのになー」

「……誤解を招くような言い方はやめろ。ゾッコンってもう死語だ

と思うんだが。それに一馬には理紗さんがいるだろう？」

龍斗の口から出た理紗、という名前を聞いたとたんに一馬は嫌そうに顔をしかめる。

「よせや、姉ちゃんは容姿はいいけど性格が最悪やねん。龍斗は家で姉ちゃんを知らんからそんなことが言えんのか。あれは悪魔やで。人の皮をかぶった悪魔や。きつと腹ん中はどす黒いもので満たされてるんやで」

一馬は一人腕を組みながらうんうんと頷いている。

そんな一馬の背後にゆらりと忍び寄ってきた少女が、それに気づいていない一馬の後頭部を思いつきりひっぱたいた。バツチーンという音が気持ちいいぐらいに教室に響き渡る。

「~~~~っだあ！ 痛い！ なんや！！ いきなりなにすんねん！！」

急に後頭部に走った激痛に叫びながら後ろを振り向いた一馬の目に入ったのは、ショートカットの髪を揺らしながらメートルほどのハリセンを手に持って左手のひらをポンポンと叩いている少女の姿だった。

自分を見下ろす少女の顔を見て一馬は大きくため息をつく。

「やっぱり恵美や、痛いやないか。あまりに痛すぎてリアクション取りづらいねん。ツツコミにも限度つてもんが……ってハリセン！？ まさかそれで叩いたんか！？ そんなもん学校に持ってくんなや！ 首が外れるかと思たわ」

いや、リアクションとかの前にまずハリセンに気づけよ。と龍斗



は心の中で一馬にツツコミを入れる。

「なーにが悪魔よ、あんたのお姉さんすっごくいい人じゃない。この前だって駅前でお年寄りの荷物代わりに持ってあげてたのよ。あんなにやさしい人はいないわ」

「無視！？ オレの抗議は完全無視かい！！……まあそれはいいとして、そんなわけあらへんて。姉ちゃん自分が買い物行くときはいつもオレを荷物持ちに連れていくんやで。あの姉ちゃんがそんなことするとは思えへん」

「あら、女の子の買い物に男の子がつきあうなんて当たり前のことじゃない。女の子に重たい荷物を持たせる男なんてどうかしてるわ」

「理不尽や！ 横暴や！ 男女差別や！ みんなそうなんだよー、みたいなこと言われてもオレは信じへんで。そ、そうや、龍斗、龍斗はどうなん？ やっぱり荷物持ちは嫌やろ？」

「そんなことないわよ、リュウは絶対持つてくれるわ。そうよね？」

ものすごい剣幕で二人に詰め寄られてさすがの龍斗も少したじろいだ。

「あ、ああ、そうだな。俺は普通に持つけど……」

その言葉を聞いた一馬は床に両手をついてがっくりとうなだれる。一方恵美はというと腰に手を当てて勝ち誇ったように笑みを浮かべている。

「ほらみなさい。リュウはあんたと違って優しいんだから。少しは見習いなさいよね」

「ウソや、龍斗も恵美の肩を持つんか。なんやこの四面楚歌、でもオレは認めへんで」

「フフーン、だからあんたはモテないのよ。顔はそこそこのいいのに性格が男としてなっていないもの。だいたい何なのそのエセ関西弁、今時流行らないわよ」

「ほつとけや！ 別にええやん俺が好きでやってんねんから。ってかもはや姉ちゃん関係なくなってるし！ これただオレが罵倒されてるだけやんか！！ だいたい恵美も人のこと言えるほどモテてへんやん。やつぱそれ性格のせいなんとちゃうん？ ぱつと見はえらい美少女やのに、実中身は世にも恐ろしい鬼の子でしたー、ってな」

「な、なんですって！ だれが恐ろしい鬼の子よ、こんなにかわいい女の子のどこが鬼だって言うのよ！！」

「はっ、自分で自分のことカワイイとか言うなや。恥ずかしくないんか…って危なっ！ ちょおまつ、ハリセンで連打はあかんで、ホンマシヤレにならへんで！」

ばしばしとハリセンで叩こうとする恵美に両腕でガードしながら二人は口論を続けていく。

その様子を巻き込まれないようにと黙って見ていた龍斗だったが、そのほほえましいともいえる光景につい思ったことをそのまま口にしてしまう。

「……ずいぶん仲がよさそうだな」

「だれが！ こいつと仲良しなんてこっちから願い下げよ（や）  
！！」

全く同じタイミングで振り向き同じ言葉を同時に叫ぶ二人に、やっぱり息びったりじゃないか、と龍斗は苦笑いを浮かべる。  
今度は内心に思うだけで口には出さなかったが。

二人のヒートアップしていた口論がちょうど途切れたタイミングで教室のドアが開いて先生が入ってきた。

「遅れてすまなかったな。ほら、ホームルーム始めるからみんな席について」

そういて教卓の前に先生が立つと教室をぐるりと見回して全員着席していることを確認する。

「えー、もう知っている者もいるとは思うが今日は時間割が変更になる。まずは第一講堂で全校集会だ。身だしなみをしっかりしておくように。それからその後なんだが、授業はやらないで帝国祭の役員決めをやることになった。急な話だが今日の放課後には役員会議があるから今日中に決めないといけないんだ。各自考えておくように。以上だ。では各自移動を始めてくれ。くれぐれも時間に遅れないように」

連絡事項を全て告げ終わると先生はすぐに教室から出て行った。それと同時に一馬が体を反転させて椅子の後ろに腕をかけながら龍斗の方を向く。

「なあなあ、今日の全校集会って帝の祖父ちゃんが来るんやったよな。せやったら今朝のこと考えると遥香ちゃんまずいんとちゃう？」

「そうだな、だけど幸いなことに全校集会は整列形態が指定されて

ないから、できるだけ遥香のそばにいようと思ってる」

「そっか、そういやこの学園はヘンなところで自由やったもんな。ともかくそれで決まりや。ほら早く行くで、遥香ちゃんの分の席もしつかりとつとかなあかんからな」

「やけに乗り気だな。何かあるのか？」

いつにもましてやる気に満ちている一馬に龍斗が首をかしげていると、二人の元に恵美がニヤニヤとした笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「どうせ落ち込んでいる遥香ちゃんに優しい言葉でもかけて好感度アップやー、とか考えてるんでしょ」

「なっ、そ、そんなわけあらへんがなー。オレはそない汚い手は使わへんでー」

だらだらと冷や汗をかきながら必死で取り繕おうとしている一馬。だれから見ても嘘をついているのが明白である。

「どうだか、あんたの考えることはいつも単純だから。それより行きましようよ。早いうちに遥香ちゃん捕まえといたほうがいいんだよ」

「ああ、そうだな。そろそろ行くか」

「あ、ちょ、まってや、おいてかないで。オレも行くんやから」

恵美と二人で教室を出ようと歩き出したのを見て一馬も慌ててそ

の後をついていく。

\*

\*

\*

「お、あれとちゃう？　おい、ハルカちゃん、こっちやこっち」

高等部校舎から五分ほど歩いた場所にある第一講堂、帝学園の全校生徒約二千人を収容してもまだ余裕があるほど広い空間に続々と集まってくる生徒達の中にリュウト達三人も一緒に集まっていた。その二千人を超える人混みの中に探していた少女の姿を見つけた一馬は大声でその名前を呼ぶ。

「バカ、大声出すんじゃないわよ。恥ずかしいじゃない。っていうかこの人混みの中よく見つけられるわね」

「アホやな、人混みの中やから見つけやすいねん。遥香ちゃん人気だから周りよりも人口密度が高いところ探せばすぐ見つかるんや。遥香ちゃんは学園のアイドルやからな」

「アホとか言うな。ホント昔からあんたはそういうことだけは頭の回転が速いわね。普通の勉強は全然ダメなのに」

「もちろんや、人間学力じゃ測れないことなんていっぱいあるねんで。美少女サーチ能力に関しては学園でトップとれる自身あるわ」

「それ自慢できることじゃないわよ。ただのストーカーじゃないの？」

「ちよつ、ストーカー言うなや人聞きの悪い。人探しには結構便利な能力やねんで。美少女限定やけど」

「やっぱ使えないじゃないの このストーカー男」

「だからストーカー言うなや！ ええやんもう行くうで。遥香ちゃんの隣誰かに取られたらたまらんわ」

「ほら、やっぱりあんたはそれが目的じゃない。実は遥香ちゃんのことストーカーしてるんじゃないの？」

「んなわけないやろ！ もうストーカーネタやめようや、地味に傷つく！ オレってそんなに信用ないん！？」

「そんなことないわよ。私はみじんも信用してないから」

「そつか、よかったー、そんなことないんかー……ってよくない！ よく考えたら信用されてないやん！ 言っていることが全然違う！！ 危ねー、危うくだまされるところやったわ」

「ちっ」

「舌打ち！？ 今舌打ちしたやん！ え、なに、オレっていつからそんな扱い！？」

「さーて、遥香ちゃんはどこかなー？」

「あっさりスル！？ やっぱりオレのことは完全無視ですか！？」

「きゃっ、ちよつとやめてください。この人ストーカーです」

「だああああ！！ だからもうストーカーネタはやめい！！」

ぎゃあぎゃあと騒ぎながらも二人は器用に人混みをかき分けて遥香のいる場所へと近づいていく。

完全に話の輪から離れている龍斗も、もういつものことなので特に気にすることなく二人のあとを追いかけていく。

しかしやはりどうみても仲がいいようにしか見えない、と龍斗は二人の後ろ姿を眺めながら思う。正直お似合いの二人だと思っし、そういった噂が流れているのを聞いたのは一度や二度のことではない（そのたびに本人達は否定し絶対認めようとしなかったが）。

龍斗でさえもいつそ本当に付き合えばいいのにと思っているくらいだ。

そんなことを考えながら歩いていると遥香とのいる場所までたりつく。周りを見回してみると確かに男子のほうが圧倒的に多く、一馬の言っていたこともあながち間違いではなかったのか、と龍斗は内心で感心する。

正直なことを言つと龍斗もあまり信用していなかった。



「遥香ちゃんおはよう。リュウから聞いたわ。なんだか今朝は大変だったみたいね」

「あ、恵美先輩おはようございます、あれ、一馬先輩も一緒ですか。あ、お兄ちゃんもいる。みんなでどうかしたんですか？」

笑顔で恵美に挨拶した遥香は三人がそろって自分を訪ねてきたことに不思議そうな顔をする。

「ちょっとね、まあ気にしないでよ。そんなことより隣あいてる？一緒にいてもいいかしら」

「あ、あいてますよ。どうぞ。」

そういつて遥香は少し移動して人数分のスペースを確保する。

「ありがとう、それで、そっちの子は？」

恵美は遥香の隣で龍斗たちがここに来た時からずっとおろおろとしていた少女に声をかける。

すると少女はいきなり声をかけられたことによつぽど驚いたのか、ぴっ、という奇声をあげて遥香の後ろに隠れてしまう。その反応がショックだったのか恵美の頬が少しひきつっていた。

「あ、違うんだ。別に怖がつてるわけじゃなくて、ちょっと人見知りが激しいだけなんだよ。あ、紹介するね。この子私のクラスの委員長をやってる小野寺皐月ちゃん。」

「あ、あの、は、はじめまして。お、小野寺皐月と申します。ど、どどうぞ、よ、よろしくお願いしますっ！」

あたふたと早口で言うと、皐月は勢いよく頭を下げる。どこか小動物のような可愛らしい印象を与える少女だった。

「な、なんてことや、こんなにカワイイ娘を見落としてたやと！篠崎一馬一生の不覚！」

目を見開いて驚愕の表情を浮かべて凝視する一馬に恵美は大きなため息をつく。

一方一馬の「カワイイ」という単語に過剰反応してしまった皐月は顔を真っ赤にしてしまう。

「かつ、かわいいなんて、そんな、わ、私なんて全然」

「ああ、もうかわいすぎる！！ あかん、こんな反則や。耐えられるわけあらへんやん！」

今度は悶絶し始めた一馬にもはや突っ込むことさえもあきらめた恵美は冷たい視線を送った後、はあ、とため息をついて皐月に笑いかける。

「ごめんなさいね、これは無視しちゃっていいから。それより私は恵美っていうの。水無月恵美。気軽に恵美って呼んでもらって構わないわよ」

「あ、恵美先輩、ですか。よ、よろしくお願いします。そ、それで、ああの、そちらの方は、もしかして……」

恵美にも深々とお辞儀をした皐月は恐る恐るといった感じで龍斗のほづをちらちらと伺い見る。

その視線に気がついた遥香が龍斗の代わりに紹介する。

「この人はね、私のお兄ちゃんなんだよ。名前は龍斗っていうんだ」

「よろしく」

遥香が紹介してくれたので、特に言うことがなくなってしまった龍斗はとりあえず微笑んで挨拶をしておく。

しかしここで忘れてはならないのが龍斗の完璧と言って申し分ないほどの容姿。遥香とともに美形兄妹として名が知られている龍斗は学園の女子生徒たちに絶大な知名度を誇る。当然近寄ってくる女子も少なくないのだが龍斗に直接言いよってくる人間は皆無に等しい。

そこにはファンクラブの存在が大きく影響していた。

龍斗と遥香にあこがれる人間が集まって結成されたファンクラブ  
『とつろつかい 燈籠会』

こちらから行動を起こすのではなく声をかけられることを悲願とするこの燈籠会の会員が龍斗や遥香に直接接触を図ろうとする者を許さない。そのおかげで絶大な人気を誇る二人は普通の学生生活を過ごせているのである。

ちなみにこのファンクラブの存在を当の本人たちは認知しておらず、燈籠会の会長が実は篠原一馬だったりするのだが

この事実ほんの一握りの会員しか知らない。

そして皐月もこの燈籠会の会員だったりする。つまり龍斗と会話

をすることが夢だったわけなのだが……

（はわわわわ、ニコツって、ニコツって微笑んでくれました！ やっぱりかつこいーですよー！）

頬に手を当てて顔を真っ赤にしながら悶絶していた。

その理由が全く理解できない龍斗達は全員が疑問そうな表情を浮かべる。その中でただ一人、一馬だけがみんなとは違う心情で眺めていた。

（しもた、やらかした！ 最近こういうの少なくなっとったからすっかり油断してたわ。こいつの笑顔は女の子にとっては危険すぎる！ あかんで、これはあかん。空気が桃色になっとる！ どうするん！ どうするんこの状況！！ オレじゃ収集つかへんわ

！！）

だらだらと冷や汗を流しながら頭をフル回転させて打開策を探す一馬。しかし救いの手は思わぬ方向から差しのべられた。

「おや、遥香さんではありませんか。お噂にたがわず可愛らしい方だ。あ、僕は帝啓弘あきひろと言います。以後よろしく」

突如として人混みの中から姿を現した少年は、遥香をまっすぐと見据えて人のよさそうな笑みを浮かべる。

（げ、帝やんか！ なんでこいつがここにおんねん。で、でも今は助かった！ ナイス！ ナイスタイミングや帝！ でも人選ミスった！！ あんたはお呼びでないで！！）

心の中でそんなことを叫びつつもとりあえず皐月が自分を取り戻し

たようなのでほっと胸をなでおろす。

「そついえばあんた確か学園長の息子とか言ってた奴よね。なんであんたがここにいんのよ」

びしっ、と人差し指を突き付ける恵美に啓弘は眉をつり上げる。

「……人を指差さないでいただきたい。僕がここにいてはいけない理由でもあるんですか？」

「大いにあるわね、遥香ちゃんが汚れるといけないからさっさとどっか行きなさい」

「まるで僕が汚いとも言いたげな物言いですね」

「ええ、そうね。少なくとも私はそのつもりで言ったわ。違った意味に伝わってしまったならごめんなさい」

「あ、でたで恵美の支離滅裂な言動。でもそれオレもなんとなくわかるわー。ほら、存在が汚いみたいなの？」

「……下手に出てみればよくもまあ言ってくれたものですね。僕が帝の血を引く人間と知っての狼藉ですか？」

声を荒げる啓弘に今まで黙っていた龍斗が口を開く。

「まあ落ち着けて一馬、恵美。なんかお前ら黒いぞ。それに帝も、何か勘違いしてないか？ 帝の血を引いてるってだけで威張るのは間違っていると思うが」

「そうそう、それや。そういうところが汚いっちゅうねん。親がどれだけ偉かるうとあんた本人は何の権力ももってへんやん。漫画に出てきそうな典型的なお坊ちゃまタイプやん」

「あ、それわかるわ。なによ、たまにはいいこと言うじゃない」

「やろ、帝にはこの言葉がぴったりやねん。たまにはは余計やけどな」

つらつらと毒を吐いていく二人に龍斗は苦笑いを浮かべる。せつかく仲裁に入っただのにあつさりと蒸し返されてしまった。

しかし学園長の息子を相手にここまで言える人はこの学園にはなかないだろう、と同時に感心もしていた。現に遥香と皐月はどうしたらいいのかわからずおろおろとするばかりである。

「篠崎！ 水無月！ これ以上の侮辱は許しませんよ！！ 父上の耳に入ったらどういうことになるのかわかっているんでしょね！

」

「あ、また親の権力に頼った」

ぴったりと息のあったツツコミを入れる一馬と恵美に思わず龍斗は吹き出してしまう。

笑われたことがよほど気に障ったのか、啓弘は肩を震わせて怒りをこらえている。

「きつ、君たち！ いい加減にしないと本当に父上に報告しなくてはいけなくなりますよ！！」

「なんやなんや、このぐらいで。ホンマちっちゃい奴やなー。こんなでいちいち頼られてるようじゃ帝の父ちゃんも大変なんとちゃうか」

わざとらしく手のひらを上に向けてやれやれ、と首を振る一馬。その横で恵美もさらに追い打ちをかけようと口を開いたところで、そのままある一点を見つめて固まってしまう。

その視線の先には不自然に人混みが途切れている空間ができており、それは徐々にこちらへと近づいてきていた。

ああ、やっぱり来たか。と龍斗は小さくため息をついて一歩前へと出てその空間と遥香の間に体を滑り込ませる。

ちょうど移動し終えたところで龍斗の前方の人混みが大きく左右に分かれて中なら高級そうなスーツに身を包んだ四十前後くらいに見える男が姿を現した。その後ろにはボディーガードらしき二人の人影も見受けられた。

見覚えのある顔、というのも今朝襲ってきた男たちの中に同じ人間がいたのを龍斗は確認していた。

「これはこれは、啓弘のお友達かな？ 息子がずいぶんとお世話になっっているようだ。私のことは……もちろん知っているね。この学園の理事長をしている帝忠則<sup>ただのり</sup>、名前ぐらいは聞いたことがあるだろう？」

その場の空気が凍ったかと思った。

威厳に満ちた声で一馬たちに話しかける忠則は順番に彼らの顔を見回していく。それが龍斗のところに回ってきたところでわずかにその両目を見開く。

「……おや？ これは驚いた。誰かと思えば鳴月家の御曹司と御令嬢ではありませんか。今朝は父上 兼継が大変気に入ったとおっしゃっておりますよ」

そう言いながら龍斗の陰に隠れるようにして立っている遥香のほうへと視線を向ける。ひっ、と小さく悲鳴を上げて遥香は反射的に制服の端をつかむ。

「ははは、どうやら私はあまり好かれてはいないようだ。悲しいことだね。別に取って食おうというつもりは全くないのに」

わざと遥香のトラウマをえぐるような言葉を吐く男に龍斗は奥歯をかみしめる。ここで荒事を起こすわけにはいかない。

周りの生徒を巻き込みかねないし、第一相手はこの学園の理事長だ。問題を起こした生徒を退学処分することなど造作もないだろう。そうなってしまうては学園内で遥香を守る存在がいなくなってしまう。

「ほう、相手を選ぶだけの知恵はある、と。てっきり後先考えずにつかみかかってくるものだとばかり思っていたが……。龍一郎といい龍彦といいどうしてあなた方の家系は思い通りにいかないのか」

「お、お兄ちゃんをバカにしないで！」

兄が馬鹿にされたことがよほど悔しかったのか遥香は本人以上に



憤慨する。よほど勇気を振り絞つての行動だったのだろう。体を震わせながらも制服をつかむ手にさらに力がこもる。

ジロリ、と目だけを動かして遥香を一瞥した忠則は吐き捨てるように言い放つ。

「小娘が。貴女に話しかけているわけではないんだよ。他人の会話に口を挟まないことだね」

しばらくそのまま睨みつけていた忠則だったが、やがて小さく舌打ちをすると踵を返して元の方向へと引き返していく。その背中を啓弘が慌てて追いかけていく。

二人の姿が人混みの向こうへと消えたところで一馬がはぁっ、と長いため息をはく。

「なんやあれ、子も子なら親も親やな。親子そろっていい性格してるでホンマ。てか龍斗もよく目合わせられるよな。オレやったら失神してしまうわ」

「まあ、俺は毎日あれ以上に恐ろしい目にあってるからな。そんなことより……。遥香、大丈夫だよ。もう理事長は行ったから」

忠則の姿が消えてからもまだ青ざめた顔で龍斗の制服の端をつかんだままだった遥香に龍斗は優しく話しかける。

「で、でも、最近なんか誰かに見られてるような気がしてたんだよね。わ、私もしかして狙われてるのかな……。」「

それでもまだ不安げな表で見つめ返してくる遥香の頭に龍斗は手を置いて笑いかける。

「大丈夫だ。俺がついてる。それに父さんや祖父ちゃんだっているんだ、あの人たちだってそう簡単に手は出せないよ」

「そ、そうなの、かな？　だいじょうぶ、なのかな？」

「リュウが大丈夫って言うてるんだから大丈夫よ。それとも遥香ちゃんもリュウのこと信用できない？」

恵美の言葉に遥香は身を乗り出して反論する。

「そんなことない！　信用してるよ、お兄ちゃんがいれば大丈夫。で、でもやっぱり不安だよ。私のせいでみんなに迷惑がかかったやうんじゃないかって」

その言葉を聞いた一馬と恵美は顔を見合わせてやれやれ、という風に大きくため息をつく。

「なんや、そんなこと気にせんでええねん。オレ達は好きで遥香ちゃんのそばにおんねんで。これぐらいのことで離れていたりはせえへん。迷惑なわけあらへんやないか」

「そうよ、私だって一馬と同じ気持ち。遥香ちゃんもずっと周りの人を頼っていいのよ」

「そ、そうだよ遥香ちゃん。私のことだってもっと頼ってほしいな。力になることはできないかもしれない。でも話を聞いてあげるくらいならできると思うんだ」

「あ、ありがとう。みんな」

次々とかけられる言葉に遥香の表情が少し和らぐ。それでもまだ完全とは言えないのを見た恵美と一馬にアイコンタクトをとる。

「そ、それでいいのよ。あとはドーンと私たちに任せちゃいなさい。一馬が全部やってくれるわ」

「え、そこでオレ！？ 普通は龍斗の名前が出てくるとちゃうんか！」

「なに言ってるのよ、人任せにするんじゃないの。あんただって男でしょ。しっかり女の子を守って見せなさいよ」

「まてまてまて、恵美はどうなんや。自分は人任せでええんかい」

「私はほら、女の子だから」

「ああ、せやったな。すまんすっかり忘れとったわ」

「な、なかなか言っじゃない。私のこともちゃんと守りなさいよね」

「えーべつに守らなくても恵美なら一人で大丈夫やん。自分で何とかなえるやろ？」

「大丈夫じゃないわよ！ 私だってか弱い女の子なんだからね」

「えー、叫びながらか弱い言われてもなー。全く守りたいっちゅー気にならないねん」

「……ホントに言いたい放題ね。あとで覚えときなさいよ」

「さてわからんなー、ちゃんと覚えとるか自信ないわ。二、三歩ぐらい歩いたら忘れとるんちゃうか？ 恵美のほうが」

「私は二ワトリか！！ どんだけ馬鹿にしてんのよ！」

今までのシリアスな雰囲気が二人の馬鹿騒ぎによってかき消されていく。そんな姿を見て遥香もようやくいつもの笑顔を取り戻していた。

それを確認すると一馬と恵美は遥香に見られないようにこっそりと顔を見合わせて親指を立てる。二人の口論が演技だとわかっていない皐月はまたおろおろと二人を交互に見ている。

いつも通りのあたたかい時間。

その光景を眺めながら龍斗は今朝牧野が言っていた言葉を思い出していた。

最近遥香の周囲が騒がしい。これはおそらく帝に関係する人間が遥香を狙っていたということ。彼らの目的が何なのかはわからない。しかし兼継や忠則が姿を見せたという事実は相手が確実に何か企んでいるということ物語っている。

おそらくこれからもあの二人は執拗に遥香を狙ってくるはずだ。そうなれば本当の意味で遥香に安全だと言える場所は限られてくるだろう。

でも、それでもせめて遥香だけはこの優しい時間の中で過ごしてほしいと願わずにはいられない。

龍斗は忠則が去って行った方向を静かに見つめる。

この遥香の過ごす平穏な世界を、あんな奴らに踏みにじ

らせはしない。

## 8 - 1 ・プロジェクト・ミレニアム

帝株式中央本社、この地上五十六階建てという高さの超高層ビルの最上階。通称『コンフィデンスヤルフロア』と呼ばれているそのフロアには部屋が二つしかない。一つはフロアのほとんどを利用してつくられた統括理事長室。そしてもうひとつはその理事長室に埋もれるようにしてつくられた小さな部屋。

本社に到着した兼継は迷うことなくその小さな部屋に入っていく。

部屋の中に照明の類はなく、代わりに壁を覆うほど大型のモニターの放つ光がうつすらと部屋内を照らし出していた。部屋の中央にはモニターと向かい合うようにして肘掛椅子が一つだけ置いてあり、それ以外のものは存在しない。

その肘掛椅子に兼継は身を沈める。

彼の見つめる大型モニターには無数のウィンドウが展開されていて、テレビ電話のようにそれぞれのウィンドウに一人ずつ映っている。

経営統括理事会、これからその重要な会議が始まろうとしていた。

帝グループの経営統括理事会には会議場というものが存在しない。それは多くの提携会社を抱えるが故に全員を収容する場所が確保できないことと、理事たちが世界中に散らばっているために一か所に集まることが難しいという理由から来るものだった。しかし理事会がすべての会社を統括している以上会議をしないというわけにはいかない。

だから経営統括理事会は各会社に必ず設置されているこのようなモニタールームで行われる。

「状況を。現在の帝重工はどうなっている」

兼継の発したその言葉が会議の始まる合図となる。

「現在取引開始時の四割を切っています。しかしこれ以上下がることはないかと。」

「こちらは鳴月龍一郎が怪しい動きをしている、という情報をつかんでいます」

「補足します。鳴月龍一郎が方々に『帝重工がなにやら面白いことをやっているらしい』と言っていることが判明しました」

「おそらくそれが我々に不信感を抱かせたのかと」

「現時点では帝重工以外の株価に影響はありませんが安心はできない状況だと思われます」

「理事長、これは明らかに鳴月グループの策略と考えてよろしいかと」

世界中の理事たちから次々と報告される情報の全てが龍一郎が関与していることを示していた。そのことに兼継は強く奥歯をかみしめる。

これが本当にあの老人によっておこされたものだとするならば本来は何の痕跡も残っていないはずなのだ。それなのに今回はそれを隠すどころかむしろ見つけてくださいと言わんばかりに派手に動いている。これでは情報をつかんだというよりは掴まされたといったほうが正確だろう。

そんなことも知らないで我先に報告しようとする理事たちに兼継は苛立っていた。

おそらく彼らは鳴月龍一郎の指示のもとグループが動いたと考えているのだろう。たった一人の人間に何ができるものか、と。しかしその考えは間違っていると兼継は断言できる。常識が通用しない人間だということを知っている。

鳴月龍一郎という人間はそんなに甘い人間ではない。奴が本気になれば今頃手を打ったところでもう手遅れになってえいたことだろう。単体でこれだけの力量。これに鳴月グループの組織力が加われば帝グループがどれだけ甚大な被害をこうむることになるかなど想像するだけでぞっとする。

もしそんなことになれば帝グループはおわりなのだ。

（ まだ先の話だと思っていたが、この辺りが潮時なのかもしれない ）

兼継は全モニターに対して音声通信をつなぐとおもむろに椅子から立ち上がる。するとモニターのすべてが沈黙して兼継の言葉を待つ。

「聞け、理事たちよ。話が帝グループは今や世界財政に大きな影響力を持つ組織となった。しかし鳴月

グループもまた我々と同等の力を有している。特に鳴月龍一郎に関しては単独でそれ以上の影響力を持っている可能性がある。今回の件も鳴月龍一郎単独で行ったこととみて間違いない。私は帝グループに対してこのような仕打ちを受けて黙っているつもりはない。そこで……」

兼継はそこでいったん言葉を切ってすべてのウィンドウを確認す



る。

「帝グループ経営統括理事長の権限をもって『プロジェクト・ミレニアム』の始動をここに宣言する。」

理事たちはその言葉を聞くとそれぞれ頷いて次々と通信を終了させていく。それによって兼継の前のモニターのウィンドウは閉じられていきだんだんと部屋を照らす光が弱くなっていく。

最後のウィンドウが閉じたことで闇に包まれた空間で、兼継は静かに椅子に腰をおろして背もたれに深く身を沈める。

「これで鳴月の時代も終わる。フハハッ、楽しみだよ、鳴月龍一郎。すべてを失ったお前は一体どんな顔を見せてくれるのだろうか？」

聞く者をぞつとさせるほどの悪意を含んだその声は誰の耳に届くこともなく空気に溶け込んで消えていく……はずだった。

「なんか楽しそうだねー、でも一人で高笑いしているとちょっと危ない人みたいで怖いよ？」

突然入り口の方から聞こえてきた声に兼継は反射的に立ちあがってそちらを見つめる。

急に声をかけられたこともあるのだが、それ以上に兼継はこの部屋に自分以外の誰かが入ってきたことに驚いていた。

この部屋には十二桁のパスワードと二種類の生体認証を通過しなければ入ってこれないようになっていた。

そして現在生体認証に登録されているのは兼継と忠則のものだけ。つまり兼継がここにいる今忠則以外にこの部屋に入れるものは存在しないはずなのだ。

しかし実際に入ってきたのは忠則ではなく、そして人間でもなかった。

兼継はそれが人間でないことを知っている。しかし人ではないにもかかわらずそれは青年の姿をしていた。不健康なほどに白い肌に琥珀色の双眸、腰のあたりまで伸ばした銀色の髪、白の布地に金の刺繍が施された司祭服に身を包んだ青年は腰に手を当てて楽しそうに兼継を眺めて笑っていた。

部屋に入ってきた青年の姿を見た兼継の眉がわずかに上がる。

「お前か、一体何の用だ」

兼継に疑わしげな視線を向けられるが、青年はその視線をまっすぐに見つめ返しながらも笑みを崩さない。

「うわお、なんか歓迎されてないみたい。なんだよー、ミレニウムを考えてあげたのはボクなんだぞ。ちよつとくらい歓迎してくれたっていいじゃないか」

満面の笑みを返された兼継はバツが悪そうに顔をそむける。

「その件は感謝している。しかし完全にお前を信用したわけではない事を忘れるな」

「ひどっ！　ボクってそんなに信用ない？」

ふてくされたような顔をして腰を折って下から顔を覗き込んでく

る青年に兼継は頬をひきつらせる。

「お前の信用なんかどうだっていい。何か用事があったのではなかったのか」

その言葉に青年は思い出したような顔をして兼継から顔を放す。

「おっと、そうだった。忘れるところだったよ。今回はミレニラムの件で来たんだった。それで、ようやく決心がついたみたいだね」

「ああ、決めたよ。お前と契約しよう。その代わり私の出した条件ものんでもらうぞ」

「フフツ、問題ないよ。その条件は必ず果たそう、約束するよ」

笑顔で了承する青年に兼継は不満げな表情を浮かべる。

「ずいぶん簡単に言ってくれるな。奴はそんなに甘くはないぞ」

「だから心配いらなくて、安心して任せなさい！ 彼だって所詮は人間なんだ。兼継クンと同じようにね」

兼継の心配を知ってか知らずか胸を張って自信満々に語る青年に、兼継は少しの間沈黙する。

「……まあいい、とにかく条件は果たしてくれよ。それさえやってくれれば私は何も言わない」

「はいはい、了解しましたー。それじゃ、兼継クンの方も準備お願いねー」

ひらひらと手を振って軽い返事をする青年の事を無視して横をすり抜け、兼継は部屋を後にする。青年は手を振ったままにここにこと笑いながら見送っていた。

ボタン、とドアのしまる音とともに、モニターの電源も切れて部屋の中が本当の闇に包まれる。

手を下ろした青年はそのまましばらく兼継が出て行った扉を眺めていたが、やがて天を振り仰いで静かに話し始める。

「ボクだよ、そうそう。……こっちの協力者は無事動いてくれたよ。……うん、今のところは順調だね。……いや、最後のはボクが回収に行くよ。……あ、そう？ わかった。……じゃあそっちはよろしく」

闇に包まれた狭い部屋の中に青年の声だけが響き渡る。

「……大丈夫だよ、失敗なんかしないさ。……フツ、アハハハッ。……うん、わかった、一応気をつけるよ。……うん、じゃあね」

その言葉を最後に青年は口を閉じ、不意に笑い始める。

「フツ、これで準備は整った。やっと、やっとこれで…… フフツ、アハハハッ」

完全に締め切られた部屋の中で少年の笑い声は誰に聞かれることもなく響く。

『プロジェクト・ミレニアム』

今、世界を揺るがす壮大な計

画が始動する。

「ってちよっと待って！！ 兼継くん鍵閉めちゃだめ！！ ボク  
ここから出られないじゃないかー！！」

この青年の絶叫も誰の耳にも届くことはなかった。

## 8 - 1 ・プロジェクト・ミレニアム（後書き）

やっと八話を投稿することができました。

前回の投稿から随分と間が空いてしまいましたね、すみません。

これからもこんな感じで思い出したように投稿することになると思うので、

よろしくお願いします。

結局兼継は生徒の前に姿を現すことはなく、なにもしないまま全校集会は終了となった。予定より大分早く終わってしまったので、龍斗たちのクラスでは予定を切り上げて帝国祭の役員決めをやっていた。

「なあ、どうするん？ 龍斗はなんか役員やらんのかいな」

「いや、特にやるつもりはないな。少しでも自由な時間を確保しておきたいし」

「あー、遥香ちゃんか。そらしゃーないわ、やっぱ心配やもんなー」

そう言いながら一馬は黒板に目をやる。まだ三十分もたっていないのに既にほとんどの役員に名前が記入されていた。

「あと残ってるのは…… 美化委員、学園祭中にゴミ拾いとか誰がやんねん。迷子委員、わざわざやる必要あるんか？ 雑用委員？ なんやあれ、もつといい名前なかつたんかい。なんや、どれも面倒なのばっか残ってるやん。案外早く終わるとか考えてたけどこれ結構時間かかるで」

ぶつぶつと文句を言いながら黒板の文字を追っていた一馬の動きがある一点を見つめてぴたりと止まる。龍斗がその視線の先を追ってみると、そこには『風紀委員』と書かれていた。与えられた枠は男女各二名となっていて、まだ誰も名前を書いていなかった。

しばらく何かを考えるようにしていた一馬だったが、急にくるり

と体を反転させると龍斗を正面から見据える。その顔は真剣そのもので、目がきらきらと輝いていた。

「……俺はやらないぞ。理由はさっきも言っただろう」

「ええ！！一人とかそんなん嫌や、薄情やで龍斗。風紀委員は見回りという名目で学園内を自由に歩き回れるんや。せやから遥香ちゃんの近くを通るルートを担当すれば少しでも長く一緒にいれるんとちゃうか？」

「確かに一馬の言うことも一理あるのかもしれないが……、しかしだな」

これ以上ないくらい熱心に誘ってくる一馬に龍斗はなかなか首を縦に振ろうとはしなかった。しかしそこで一馬も引き下がらずに一緒にやろう、と勧誘する。それでも龍斗の反応は薄い。

そんなやり取りを続けていると、それを遠くから眺めていた恵美がやってきて話に加わる。

「あら、やってみればいいじゃないの。私一年の時にやったけど本当に一馬の言った通りよ。ただ校内を歩いて回るだけ。そんなに大変な仕事じゃないわ」

「せやせや、なあー龍斗ー、一緒にやろうやー。せつかくの学園祭なんやから楽しまなきや損やで。遥香ちゃんも龍斗が楽しそうにしてるほうが喜ぶと思うで」

結局二対一のような感じになりながら龍斗は二人の勧誘について考える。

別にやりたくないというわけではない。それにさっきは自由な時



間を多く、とは言ったものの実際は模擬店もあるので役員に入らなくても忙しいことは忙しいのだ。

それだったら委員会に入っても同じことかもしれない。と龍斗は少し考えてから結論を出す。

「……そうだな、せっかく誘ってくれてるんだし、やってみるのもいいかもしれない」

それを聞いた一馬は少々大げさすぎるほどに喜んで大きくガッツポーズをする。

「いよっしゃ、決まりやな。ほな名前書いてくるわ。あ、龍斗も分も書いておくからええで」

立ち上がろうとしていた龍斗を片手で制して一馬は黒板へと歩いていく。その背中を恵美はあごに手を当てて考えるようにしながら見つめていた。

「……私もやろうかしら。風紀委員」

ぼそつ、とひとり言のようにつぶやくと恵美も一馬のあとを歩いていき、一馬の名前の横に自分の名前を書き込んだ。

「お、なんや恵美も風紀委員やるんかいな」

「なによ、私がいちゃまずいことでもあるの？」

「いやなんでそうなんねん。オレはそういう意味で言ったんやないで。一緒にガンバろううなー、ちゅう意味で言ったんや」

「そ、そう。だったらいいのよ。あんた自分からリユウを誘ったんだからサボンじゃないわよ」

「はは、ホンマにオレ信用されてへんのな、まあええけど。今回はサボったりせえへんで。オレ今日のことではホンマに龍斗は遥香ちゃんのおそばにおったほうがええと思たんや」

そこで一馬の顔が真剣な表情へと変わった。めったに見ることのない一馬の真剣な表情に恵美の方もかまえてしまう。

「恵美は理事長の目見とったか？ あれはやばいで。完全に獲物を見る目やった。遥香ちゃんは確実にあいつらに狙われとる。それも誘拐されてもおかしくないレベルでな。せやけど龍斗はクラスでも人気者やからな、それに仕事も早いからきつと倍近くの仕事回されるはずや。そうなったら模擬店の準備を抜け出すことは難しくなるやろ？ せやったらいつそ何か委員に入ったほうがよっぽど自由に行動出来ると思ただけや。風紀委員なら決まったルートを廻るだけやから龍斗の分くらいはオレが肩代わりできそうやん？ そしたら龍斗は完全フリーちゅうわけや。これで遥香ちゃんは安心やろ？」

「一馬…… あんた妙にやる気あると思ったらそんなこと考えてたのね」

「オレかて遥香ちゃんには幸せに暮らしてほしいねん。せやけどオレじゃ何にも役に立てへん。そして龍斗にはそれができる。せやったらオレは龍斗を助けることで結果的に遥香ちゃんを守ることになるんじゃないか、って思っただけや。なにもできへんまま黙って指をくわえてみてるなんてオレにはできへんからな」

「……」

あまりにも真剣に話す一馬に恵美は言葉をなくしてしまう。ただその顔を見つめることしかできなかった。

知らなかった。一馬はちゃんと自分にできることを考えていたんだ。

自分はあれを体験してそれから何か考えただろうか？ 少しでも自分にできることを探そうと努力しただろうか？ リュウがいれば大丈夫と考えていたのではないのか？

本当に人任せにしていたのはどっちだったのだろうか

普段は面倒なことからはすぐに逃げてしまうし、何かあるとすぐ他人に任せてしまう一馬。その一馬がここまで遥香ちゃんのことを考えているとは思ってもみなかった。

今の自分にできること……

一馬が言っていたことは確かに真実だと思う。恵美だってできることなら守りたいと思う。しかし、それは思うだけ。

龍斗は恵美たちのずっと前からそうやって。

恵美は教室の端の席に座って片手で頬杖をつきながら窓の外を眺めている龍斗の姿を見つめる。

なんだかその姿が急に遠い存在のように感じた。

「とまあなんかカッコいいことつらつらと並べてみたけどやっぱりめやな。シリアスはオレには向いてへんわ」

「……は？」

今までの真剣な様子から一転、いきなりいたずらっ子のような表情になった一馬に、その急な空気の変化についていけず恵美は呆けたような声を出す。

「あれ？ あれー？ なにその意外そうな反応。もしかして今の本気にしちやった感じか？ アホやなー、オレがそないカッコいいこと考えるわけあらへんやん。もしかして今のオレカッコよかった？  
なあ、カッコよかった？」

楽しそうに顔を覗き込んでくる一馬に恵美の顔がみるみる赤くなっていく。その肩が震えていることに一馬が気づくことはない。

「お、なんか赤くなつとる。なんや意外と照れ屋さんなんやな、隠さんでもええのにー。ってなんや、どうした？ ハリセンなんか持つて、とかどつから出したんねんそれ。……いやまでまで、なぜ振りかぶる。早まるなや、ちよつ！ いやあああああ」

バッチーン、という音とともに一馬の絶叫が教室内に響き渡る。それを聞いてもなお一馬を助けようとする者はこの教室内にはいなかった。

9 - 2 ・ 風紀委員会

\*

\*

\*

「痛い」

ハリセンでたたかれて赤いラインの入った頬を押さえながら一馬はぼそりとつぶやく。

「あたりまえよ、全力でやったんだから」

胸を張って答える恵美に龍斗は苦笑を、一馬は恨めしげな目線をおくる。

「かなりいい音してたからな。たぶん廊下まで響いてたぞ」

「せやせや、今回ののはやりすぎやで。もう少し手加減しても」「無理ね」　　「っておい！　即答かよ！！」

一馬は大きくため息をついて頬杖をつき、黒板の方へ目をやる。

「で、結局風紀委員の女子枠が一人残ったわけか。龍斗がやるって知ったら殺到すると思たんやけどな」

「馬鹿ね、逆よ。みんな牽制しあっちゃって誰も立候補できなくなってるのよ」

そう言って恵美は教室内をぐるりと見回す。教室のあちこちに仲

の良い女子どうしが集まっていた。それらがの話声は恵美たちのところまでははつきりとは聞こえてこなかったが、『龍斗君』や『燈籠会』という単語が聞こえてくるあたりで、何を話しているのか想像するのは容易だった。

「このままだと決まないとちゃうかな。恵美は誰か誘う奴はおらへんのか？」

「そうね、特にこの人っていうのはいないわ。それにあんたはこの状況で誰か一人を選ぶ勇氣ある？」

「……無理やな。きつとクラスの女子全員から反感買うことになるで」

「でしょ、私にもさすがにそんな勇氣ないわ。これからずっとクラスの中で肩身の狭い思いをするなんていやよ」

「せやなー。けどどうする？ この状況作つたのオレらやし。いまでも十分居心地悪いんやけど。おもにオレに向かう女子の視線が痛い」

「まあなんとかなるわよ。まだこのクラスには一人救世主が残ってるわ」

「救世主？ 誰やねんそれ」

一馬が不思議そうな顔で聞き返したところで、ズパーンという轟音とともに力いっぱい教室の扉が開け放たれた。クラスにいた全員が驚いてそちらに視線を移す。

「おはよー諸君。遅れてごめんなんだぞー」

直前の行動とは正反対の間延びした少女の声がしんと静まり返った教室に響き渡る。

ポニーテールにまとめた髪を揺らしながら教室に入ってきた少女は周囲の空気を全く気にせずに自分の席にかばんを置くと、まっすぐに龍斗たちのほうに歩いてきた。

「おはよー、いやー大変だったんだぞー。たった三秒遅れただけでー、反省文百八枚だってさー。これってひどくないかー？」

「あ、ああ。そうだな。」

何事もなかったかのように話しかけてくる少女に頬をひきつらせながらも龍斗はなんとかこたえる。

「そうだろー？ でも反省文で終わってよかったーって感じなんだよなー。校内掃除とかだるいし。あれ？ ところでみんなはなんで固まってるんだー？ 何かあったのかー？」

カクン、と首をかしげる少女に一馬は脱力する。

「まず最初にそれに気づけや。ってか誰のせいでこうなったと思ってるねん」

「お、帝国祭の役員決めかー。もうそんな時期なんだなー」

「人の話聞けや！ あんたのせいやで！ ちょっとは自覚せい！」

自分で質問をしておいてあっさりと次の話題に切り替える少女に

一馬は即座にツッコむ。至近距離で叫ばれているにもかかわらず少女には全く動じた様子はなく、一馬を無視して　むー、と呻りながら真剣に黒板の文字を追っていた。

「無駄よ一馬。楓はいつつもマイペースなんだから」<sup>かえで</sup>

「確かに楓は昔からマイペースだったよな。俺も最初会ったときは会話するのに苦労したよ」

「ん、褒められてるのかー？　じゃあとりあえず喜んでみる。わーい」

「いや誰もほめてへんから。なんで今の会話からそんな解釈ができんねん」

「無駄よ一馬。楓はいつつもマイペースなんだから」

「同じ言葉で突っ込まれた！！　その関心のなさそうなツッコみやめて！！」

「私もなんか役員やりたいぞー。なんか空いてるとこないかー？」

「これだけ騒いでも完全無視！？　……もうええ。オレなんてどうせ永遠に空気扱いでええんや……」

膝を抱えて体育座りの恰好で床に座り込む一馬だったが、楓はそれに見向きもしない。

「お、風紀委員があいてるー。誰もやらないならわたしがやるー」



あまつさえその横をすり抜けて黒板へと歩いていく始末。さすがの一馬でも精神的に耐えられなかったのだろう。もう声をかけるのもはばかられるくらいに落ち込んでしまっていた。

「なあ、龍斗。オレ……嫌われてんのかな？」

一馬は顔を両腕にうずめたまま脱力しきった声で呟く。

「ま、まあそんなに落ち込むなって。楓はいつもあんな感じだ。あんまり気にしないほうがいいぞ」

その言葉に一馬は体育座りのまま顔をあげて龍斗を見上げる。

「じゃ、じゃあオレは嫌われたわけやないんや」「なんだ一馬いたのかー、というか何やってるんだー？ そんなところに座っていると通行の邪魔だぞー」……もうええ。オレなんてどうせ一生こんな扱いのまま終わるんや」

戻ってきた楓の一言によって再び一馬はふてくされるのであった。

\* \* \*

「んー、終わったー。よっしゃ、今日の授業もこれで終了や。龍斗、帰るでー」

チャイムが鳴ると同時に一馬は椅子から立ち上がって伸びをする。

「いや、この後委員会があるだろう。まだ帰れないぞ」

「ああ！　そういやそんなのもあったな、すっかり忘れとったわ。で、どこに集まるんやっただけ？」

「実は俺も正確には覚えてないんだよな。確か四階の……」第八講義室よ」そう、第八講義室だ。ありがとう恵美」

後ろ彼聞こえた恵美の声に、龍斗は振り向きながらお礼を言う。

「どういたしまして。それにしても龍斗が忘れるなんて珍しいこともあるのね。一馬は論外、ついさっき今回は忘れないって言ったのは誰だったかしら」

「あははー、やっぱ覚えてられなかったか。まあオレが忘れても恵美が覚えとるから大丈夫やろ。信賴してるで、恵美」

「変なところで信用しないでよね。ちょっとは自分で努力しなさい」りゅうとー、一緒に委員会行くぞー」……相変わらず楓はマイペースね」

話の流れを完全に無視して割り込んできた楓に恵美はがつくりと肩を落とす。しかし当の楓自身にはまったく自覚がないので不思議そうに首をかしげていた。

「ま、まあみんな集まったことだし行くか。ここからだちょっと歩くな」

「せ、せやな。早めに出たほうがええやろ。ほないこか」

とりあえず話を先に進めることで二人はこの空気を脱することに

した。幸いなことに楓もこれに乗ってくれたようなので龍斗はほつと胸をなでおろす。しかし楓から帰ってきた反応は龍斗たちの予想の斜め上を行くものだった。

「あー、そうそう、第八講義室だったよなー。教えてくれてありがとなー。じゃ、講義室で会おうか。またー」

ひらひらと手を振って楓は一人で教室を出て行ったしまったのだ。楓の突飛な行動には多少の耐性がある龍斗たちでさえもこれにはさすがに啞然としてしまった。

「え？ 一人で行くん？ てかいま自分から一緒に行こう言っ  
てなかつたか？」

「確かに言ってたよな。しかも俺は名指しで呼ばれてた気がするんだが」

「ま、まあそれが楓なのよ。ほら、私たちも行きましょう」

予測のできない楓の行動にしばらく固まったままだった三人だったが、気を取り直して教室を後にした。

### 9 - 3 ・ 風紀委員会（前書き）

ようやく九話まで来たところなのですが、この辺りで私が投稿しているもう一つの作品である「1人と999人の戦争」の方を先に仕上げてしまおうと思っています。

ですので、「ETARNIA STORY」はしばらく更新できないことになるかと思っています。本当に申し訳ございません。

その埋め合わせとは言いませんが、「1人と999人の戦争」の方もぜひ読んでいただけると嬉しいです。

『では全員集まったようなので風紀委員会を始めたいと思う』

黒板の前に立っている風紀委員長の声が教室内に響き渡る。といっても別に叫んでいるわけではなく、単にマイクを使って話しているだけのことだ。もともと複数学級の合同授業のために造られたこの第八講義室は通常の教室の約五倍の広さがある。そのためマイクなどを使わないと教室の奥まで声が届かないのだ。

『まず風紀委員の仕事について説明する。今から配布するプリントを見てくれ』

委員長がそう言うのと、最前列に座っていた数人が立ち上がったプリントを配り始める。おそらく彼らも副委員長や書記といった何かしら責任者側の人間なのだろう。

龍斗が何となくその様子を眺めていると、横に座っている一馬が肘でつついてきた。

「なあなあ、左の列のプリント配ってる子かわええと思わへん？」

その言葉に龍斗は片手で頬杖をつきながらため息をつく。

「一馬、お前はそういうことばかりに興味がいくんだな」

「なんや、美少女に心ときめくのは男の性さがやないか。龍斗もそう思うやろ？」

「いや、特に思わないが」

「あかんなあ、あかん。もつと青春せなあかんで！ そんなんじゃ絶対彼女できへんわ」

「いや、別にほしいと思ったことないんだが」

興味のなさそうな龍斗の返答に一馬は口をとがらせる。

「なんや食い付き悪いなー。男同士でこういう話すると普通はもつと盛り上がるもんなんやけど」

「そういうものか？ 別に面白いとは思わないんだが。……ああ、ありがとう」

話しているうちに龍斗たちのところにもプリントを持った女子生徒が回ってきたので、龍斗は礼を言つて一馬と二人分を受け取る。するとその女子生徒はわずかに頬を染めて い、いえ。と短く答えると逃げるようにして次の人の方へと歩いて行った。

「ほら、一馬の分。どうせすぐになくすと思うけどな」

にやつ、といたずらっ子のような笑みを浮かべてプリントを差し出す龍斗に一馬は恨めしげな視線を送る。

「……ホンマ龍斗は無自覚に人の好意を集めるプロやな」

「は？ なんのことだ？」

「いや、ええねん。気にせんといてや」

ネガティブなオーラを放つ一馬に龍斗はわけがわからずに首をか上げた。

「ああ、生まれ変わるならオレは龍斗になりたいわ。母ちゃんは美人やし父ちゃん社長やる？ 何より遥香ちゃんみたいなカワイイ妹もいて生まれながらの人生の勝ち組やん」

ぶつぶつと念仏でも唱えるかのようにつぶやきながら一馬は机に突っ伏す。

「何を言っているのかさっぱりだが、俺になっただっていいことばかりじゃないと思うぞ」

「なんや、不満なことなんて何もないやろ？」

「俺になったら祖父ちゃんの修行がセットでついてくる」

「……あかん、そら勘弁してや。あんな修行三日で死ねるで」

『おいそこ、私語は慎むように。そう、お前たちだよ鳴月、篠原。風紀委員は全校生徒の規範にもなるんだ。気を引き締めて取り組みなさい』

マイクで拡大された委員長の注意が突然飛んできたことに、二人はびくつ、と肩を震わせて驚いた後顔を見合わせる。名指しで注意されたことで教室内にわずかに笑いが起こり、委員長はそのことに眉をひそめる。

「やったー、ちょっと目立てたでー。これで誰かカワイイ子が振り

向いてくれへんかなー」

「……ホントお前はそればっかだな」

ぐでー、と机に伏せたまま投げやりな声でそれでも貪欲に美少女を求める一馬に、龍斗はただため息をつくことしかできなかった。

『まあいい、二度はないぞ。それでは全員にいきわたったようなので再開する。まず主な活動だが基本は校内の巡回だな。ルートと時間を決めて各自二人ペアを組んで全校を回ってもらう。ペアは各自自由に決めていいぞ。じゃあ次』

淡々とプリントの文章を読み上げていく風紀委員長の声だけが教室内に響く。

『風紀委員の仕事は大きく分けて四つ。服装や頭髪の乱れのチェック、校内の破損部位の報告、クラス展示および模擬店の進行状況の確認だな。まあこれらは形式的なものでかまわん。もともと我々がやらなくても各生徒で十分やってきているからな。だから実質風紀委員の仕事は残りの一つだ』

委員長はそこでいったん言葉を切って教室内をぐるりと見回す。

『生徒同士のいざこざの仲裁。これがもつとも厄介な仕事だな。帝国祭準備期間及び帝国祭期間中は頻繁に学生間の喧嘩が起こる。言い争いで済むならまだしも殴り合いを始める輩までいる始末だ。これの仲裁が最も多い仕事となるだろう。一応マニュアルは組んであるがそんなものは当てにならない』

「……じゃあそんなもん渡すなや。資源の無駄やないか」



『黙れ篠原。二度目はないといったな。貴様は後で私のところへ来い』

本当に小さな声でつぶやいたのにかかわらず委員長には聞こえていたようで、ピンポイントで厳しい叱責が飛んできた。まさか聞こえるとは思っていなかった一馬は一瞬だけ驚いて顔を上げ、何があったのかわからないような顔をしていたが、委員長と目が合うとすぐにまた机に突っ伏す。

いつもなら騒ぎ出す一馬が反論しなかったのをみて、龍斗は意外そうな顔を一馬に向ける。

「今日はやけに素直だな」

「いや、なんとなくあれには勝てへんような気がしてな。恵美と同じ空気を感じるねん」

「ああ、なるほど」

龍斗が頷いて前に視線を戻すとちょうど委員長と視線がぶつかった。じつとこちらを見つめてくる委員長に龍斗もなんとなく目をそらすタイミングをつかめずにいると、突然委員長の口元がニイ、と不気味につりあがった。

『鳴月、お前もだ。一馬を連れて私のところへ来い。たっぷりとお話ししようじゃないか』

委員長の反論は許さないという声に龍斗は自分の背中になにか冷たいものが走ったのを感じた。

『まあそれはいいとしてだ。くそ、奴らのせいで話が進まん。とにかく君達には喧嘩の仲裁を頑張ってもらう。やり方は何でもいい話し合いなり先生を呼ぶなり全員腕っ節で黙らせるなりしてとりあえず喧嘩を止めるのが仕事だな。早速明日から始まるからペアは今日中に決めておくように。以上だ』

そう言つて委員長は壇上から降りて講義室を出て行つた。それに続いて他の生徒たちもぞろぞろと講義室を後にしていく。

「はあ、やつと解放されたわ。ほな帰るで」

「委員長のところへは行かなくていいのか？」

「わざわざ自分から怒られに行くほど暇じゃないねん。せやったら龍斗だけ行つたらええやないか。オレは帰るで」

そう言つて立ち上がるうとした一馬だったが立ち上がる前に頭を強く押されてまた座りこんでしまった。

「いった！ なんや、だれやねん！」

頭をさすりながら後ろを振り返つた一馬の目に映つたのは……

「篠原、この私から逃げようとはいいい度胸じゃないか。え？」

先ほど出て行つたはずの委員長の姿だった。

「え？ 委員長？ だ、だって今さっき出て行つたやないか。なんでここにおんねん！」

そんな一馬を完全に無視して委員長は龍斗の方へ顔を向ける。

「もちろん鳴月も忘れていないよな？」

満面の笑みで、しかしちつとも笑っていない目を向けられた龍斗はただうなづくことしかできなかった。

\*

\*

\*

「……何やってんのかしらあいつら」

「あつははー。なんか面白いことになってるなー」

三人のやり取りを遠くから眺めていたこの二人もなぜか一緒に連れて行かれたのは余談である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7072j/>

---

ETARNIA STORY

2010年10月10日05時18分発行